

フォーラム

## 戦争はすべての父

民主政アテナイにおける戦争・帝国・自由のポリティクス

基調講演 クルト・ラーフラウプ（中尾恭三訳）

コメント 篠原道法・岸本廣大

レスポンス（野村紅太訳）

### はじめに

2013年3月に、古代ギリシア・ローマ史研究者でブラウン大学古典学部名誉教授クルト・ラーフラウプ氏が、日本学術振興会（招聘代表者：東京大学橋場弦教授）の招聘により来日し、関西では3月29日にセミナー‘War is the Father of All: The Politics of War, Empire, and Freedom in Democratic Athens’（於大阪大学）、翌3月30日に古代史研究会例会（於京都大学）で、講演“Leaders in War and Bravery”: The Ideology of War in Late Fifth-Century Athens’がおこなわれた。大阪大学でのセミナーは、西洋史学研究室の院生・学生に加えて、京阪神の各大学から多数の参加を得、終始なごやかにおこなわれた。以下に、当日の講演原稿と、若手研究者2名によるコメント、そしてコメントへのリプライを掲載するものである。挑戦的なコメントによって議論を盛り上げてくださったコメンテータの篠原道法・岸本廣大の両氏、翻訳にあたってくれた中尾恭三・野村紅太の両氏、当日の参加者のみなさま、そして何よりも、誠実で温かい回答によって後進を激励し、今回の掲載にあたって当日のリプライを原稿にまとめてくださったラーフラウプ教授に、この場を借りてあらためて感謝を表したい。

（栗原麻子）

### 訳者解題

ラーフラウプ教授は、1970年スイスのバーゼル大学でPh.D.を取得後、ベルリン自由大学を経て、1978年、ブラウン大学に就任した。現職はブラウン大学古典学・歴史学名誉教授である。2004年にアメリカ歴史学協会から、ジェームズ・ヘンリー・ブレストッド賞を授与されている。

その業績は、アルカイック期・古典期ギリシアの社会・政治・思想史、共和政期ローマの社会・

政治史、古代世界の比較史、さらにギリシアにおける歴史叙述と、多岐にわたっている。代表作として *Die Entdeckung der Freiheit: Zur historischen Semantik und Gesellschaftsgeschichte eines politischen Grundbegriffes der Griechen* (『自由の発見: 歴史の意味論とギリシアの政治的基本概念の社会史』), München, 1985 (*The Discovery of Freedom in Ancient Greece*, first English ed., revised and updated, Chicago University Press, 2004) があげられる。編著に *The Greek Polis and the Invention of Democracy: A Politico-cultural Transformation and Its Interpretations* (『ギリシア・ポリスと民主政の発明: 政治・文化的変容とその解釈』), Oxford, 2013、J. オバーと R. W. ウォレスとの共著に *Origins of Democracy in Ancient Greece* (『古代ギリシアにおける民主政の起源』), Berkeley, 2007 などがある。

本稿では、古代ギリシアにおける「自由」と帝国支配との関係が論じられる。アルカイック期はじめのギリシアでは、「自由」は奴隷と対比されるかたちでしか理解されなかった。しかし前5世紀以降、民主政がギリシアで発達していくにしたがって、集団内での政治的権利をあらわす用語に「自由」が用いられるようになり、概念の抽象化がすすんだ。拡大して国家の自由を意味するようになったのは、ペルシア戦争の経験から帝国支配と帝国への隷属を目の当たりにしてからである。これ以降ギリシア人は、帝国への隷属に対立する「自由」を絶対的な価値へと高めていった。

ラーフラウプ教授が本稿であつかう主題は、前5世紀のアテナイによる帝国支配と「自由」概念とのかかわりである。ペルシア帝国にたいする戦勝後、民主政体を発達させていったアテナイは歴史上もっとも偉大な文化的発展を達成するかたわら、デロス同盟の盟主としてギリシア諸都市に帝國的支配をおよぼしていった。その帝国の絶頂期が前5世紀後半のペリクレス時代であった。その時期、アテナイは民主政の基礎として「自由」概念を用いる一方で、帝国支配を正当化する概念装置としても「自由」を利用した。豊富な文献史料を参照しながら、ラーフラウプ教授によって論じられるのは、この2つの相対する要素の緊張状態である。

(中尾恭三)

## 基調講演

クルト・ラーフラウプ (中尾恭三訳)

### 【要約】

わたしたちは前5世紀アテナイを偉大な文化と人文主義の「黄金時代」とみなす。時代の特徴は、パルテノン神殿、ペイディアスの彫刻、ソポクレスの悲劇、アリストパネスの喜劇、トゥキュディデスの『歴史』、そしてソクラテスによる哲学の勃興である。しかし、古代の史料が指し示すところによれば、ペリクレス時代とかれの後の時代に生きた同時代人たちは「偉大さ」を戦争でのすばらしい勝利、前例のない帝国の勢力、比類なき自由によって定義した。このすべての功績は、強力な市民理念に基づいて、共同体の持続的な軍事的・政治的支配に独自のやりかたで注力した市民によって成しとげられた。アテナイは海上帝国を築きあげた最初のギリ

シア人国家であったとともに、民主政の概念を極限にまでおしすすめた国でもあった。帝国と民主政は相互に結びつけられていたのである。アテナイ市民は、以後 2,000 年以上にわたって並ぶものなかつた広範囲におよぶ政治参加、権力、責務を享受した。しかし、ペリクレスの死から 25 年たつて、飢えに苦しみ消耗したアテナイはペロポネソス戦争に敗れ、ほぼ完全に破壊されてしまった。この論考では、わたしたちの時代にも非常に意義深いものである、アテナイの政治と戦争理念に固有の緊張と矛盾、帝国と自由、これらの民主政との密接な結びつきを論じる。

## 1 はじめに\*

初期ギリシア人哲学者ヘラクレイトスはこう言っている。

「戦争はあらゆるものの王、あらゆるものの父である。あるものを神々、またあるものを人間として戦争は明示した。さらに、あるものたちを奴隷とし、他の者たちを自由とした。」<sup>(1)</sup>

人類史において、戦争は直接的、間接的にきわめて偉大な技術的、文化的発展をうながしてきた。古代ギリシアも例外ではない。戦争がなければ、ホメロスの叙事詩『イリアス』も、パルテノン神殿も、ヘロドトスの『歴史』やトゥキュディデスの『歴史』もなく、おそらく、わたしたちに馴染み深い歴史叙述などが残されることもなかつたであろう。<sup>(2)</sup> この論考でとりあつかうように、戦争と、戦争によって征服された帝国がなければ、民主政もなければ、完全な自由の意識もなかつたのである。人類とは謎にみちた存在だ。これこそがもっとも関心を抱く問題である。

歴史において、創始的な戦争経験のひとつがペルシア戦争であった。それは、当時、地中海からはるかインドにまでひろがっていたペルシア帝国を統べる大王によって遂行された、ギリシア征服の試みであった。ダレイオス大王は、前 490 年マラトンの戦いで敗北し、クセルクセスは前 480 年のサラミス海戦と前 479 年のプラタイアの戦いで敗北した。次の一節は、悲劇詩人アイスキュロスの『ペルシア人』からの引用である。

おお、ヘラスの子らよ、行け！自由を守れ！

子供、妻、父祖代々の神の宮居、先祖の墓を守れ。

今ぞわれらすべての戦いぞ！ （第 402-5 行、湯井壮四郎訳）

---

\* 2013 年 3 月に大阪大学文学研究科で開催された講演会での講演者として招聘いただき、手厚い歓迎をいただいたこと、栗原麻准教授と同僚のみなさまに感謝いたします。コメンテータを勤めてくださった篠原道法さん、岸本廣大さんのおふたり、ディスカッションに参加してくださったみなさまにも感謝いたします。貴重な意見としてフィードバックさせていただきます。

(1) 哲学者ヘラクレイトス（前 6 世紀後半）、断片 53。Diels-Kranz, no. 212 in Kirk et al. (1983), pp. 193-94, trans. Freeman (1948), p. 28.

(2) Cartledge (2001) を参照。

これは、前480年のサラミス海戦の始まりを告げた「自由への闘いの声」の詩的表現である。喚声は早朝の静けさをうちやぶり、夜どおし待機し、ギリシア艦隊を襲撃し敗走させようともくろんでいたペルシア無敵艦隊に衝撃をあたえた。伝令はペルシア帝国首都スサで勝利を期待していた人びとに、次のように報告した。

まず真先に、大歓声とともにヘラス側から騒ぎが起こり…  
意表をつかれてヘラス攻めの全軍に恐怖感がおそいます…  
すると今度はわが軍からペルシア語のざわめきが聞こえたとみるや、  
とやこう言う間もございませぬ。 (第388-92行、第406-7行、湯井訳)

アイスキュロスの描写ではギリシア人は一体となって歌っているが、ペルシア人は海の波が碎ける音にも似たわめき声で応答する。実際ペルシア方では、乗組員たちが多数の言語をつかって叫んでいたであろう。この様子は、ホメロスの『イリアス』をわたしたちに思い出させる。そこでは、静かな決意を抱いて合戦へ行進していくギリシア人たちと鳥のようにさえずるトロイア人たちが対比されている。ここでも両者の対比は、深い意味合いをふくんでいる。かたやギリシア人側は統一と自由意志を表現し、かたやトロイア人側は僭主のくびきのもとでの民族的多様性を表現している。

少し紙幅を割いて、この悲劇『ペルシア人』に関連する4つの問題を考えてみよう。第1に、ギリシア人がペルシア戦争で最終的に勝利したわずか7年後の、前472年に上演されたことである。アイスキュロス自身も Marathon とサラミスで戦った。かれの兄はペルシアの戦艦にしがみつき、腕を切断された時に死亡した。詩人の墓石に刻まれた詩は、かれの名、父、都市に言及し、くわえて次のことを伝えている。

「かれの気高き勇気を、Marathon の聖なる野とこれをよく知る長髪のペルシア人たちが伝える。」<sup>(4)</sup>  
墓石にはわたしたちが深く賞賛するような詩的表現は一切ない。詩人が都市の勝利に貢献したことを誇る言葉のみである！

第2の点は、すでに悲劇『ペルシア人』が、ペルシア戦争の一般的な解釈を簡潔に表現していることである。悲劇では、ギリシア人に「隷属のくびき」を強いようとするダレイオス大王の意図が強調されている。これは、ギリシア人の性質と対比させるためである。大王の母アトッサは、夢の中で息子が2人の若い女性を戦車につないでいるのを幻視する。ひとりにはペルシアの装束をまとうており、みづからすすんで誇らしげに従っている。他方でギリシアの装束をまとうもう一人は、抗って戦車を転覆させ、大王をほこりまみれにして落車させている。アトッ

(3) ペルシア人の喧騒 (*rhotas*) については、Hall (1996), p. 139 を参照。ギリシア勢とトロイア勢との対比は、ホメロス『イリアス』第3巻第8-9行；第4巻第429-38行。「自由への闘いの声」の用語は、McPherson (1988) のタイトルからの借用である。

(4) 墓石については、作者不詳『アイスキュロスの生涯』第II節、パウサニアス『ギリシア案内記』第1巻第14章第5節を参照。兄弟についてはヘロドトス『歴史』第6巻第114節を参照。

サがアテナイの指導者と貴族について質問したとき、合唱隊（コロス）はつぎのように声高に返答している。

「かれらは何人の奴隷とも、何人の臣下とも呼ばれておりません！」<sup>(5)</sup>

それゆえ、合唱隊の返答は後に常套句となる内容を先取りしているのである。すなわち、ペルシア人と他のアジアの民族はペルシア大王の専制支配に従属し、すすんで「隷属」を受け入れる一方で、ギリシア人は自由である、ということである。ギリシアの自由を守った戦争としてのペルシア戦争、自由の維持を成し遂げるにあたってのアテナイの決定的な貢献、これらふたつはその後数十年間のうちに、アテナイ人たちの誇りを支える柱、アテナイの偉大さを主張する根拠、帝国イデオロギーとなったのである。

第3に、悲劇『ペルシア人』はギリシア人のサラミス海戦勝利を祝っていることはあきらかであるが、注目に値する点として、勝利者の視点からではなく、敗者の視点から語られている。つまり、アテナイ人の視点ではなく、ペルシア帝国首都スサにいる人びとの視点から語られているのである。この悲劇を鑑賞するわたしたちは、ペルシアの長老たちとともに戦果の報告をいまかいまかと待ち望む。合戦での崩壊と多くの有望な人びとが戦死したことを知り、長老たちとともにうちひしがれる。大王クセルクセスは、憤怒にかられた失意の人物であり——まったく歴史的ではないが——、過度の野望に駆られ、賢人の警告と歴史の教訓をかえりみなかったことから、自国に多くの悲劇をもたらす原因となった。この大王がついに故郷に帰りついたとき、わたしたちはかれに同情せざるを得ない。アテナイの観衆とおなじくわたしたちも、神が定めた境界——アジアの領域はペルシア大王に、ヨーロッパの大地はギリシア人に帰属する——を乗り越えてしまったことを理解する。そして、再びアテナイの観衆とおなじくわたしたちは、アテナイ艦隊がエーゲ海の対岸で活動し、アナトリア半島西岸地域——アジアの領域——での支配を確立した、まさにその時を不気味にも悟るのである。<sup>(6)</sup>

最後の4点目として、悲劇に資金を提供した後援者が、まもなくアテナイでもっとも偉大な政治家となった、ほかならぬ若きペリクレスであったことである。前440年代後半から10年以上のあいだ、かれは異論なきアテナイの指導者であった。当時アテナイは民主政下にあったが、著名な歴史家トゥキュディデスの言葉によれば、ペリクレスは「第一人者」としてアテナイを統治した。理想的な民主政の指導者であり、判断力にすぐれ、まったくのところ清廉で、気まぐれな民衆を飼いならす主人として、トゥキュディデスはペリクレスを英雄化した。しかし、ペリクレスは、アテナイの帝国主義政策にも関与した。この政策が原因となって、スパルタはみずからの同盟諸国の利益を着実に侵食していくアテナイを制止しようと、宣戦布告せざるを得なくなった。スパルタは前432年にもうひとつの「自由への闘いの声」をあげたのである。

(5) 隷属のくびきについては、アイスキュロス『ペルシア人』第50行を、アトッサの幻視については第181-97行を、コロスの返答については第242行をそれぞれ参照。

(6) クセルクセスの帰還については、同第907行以下、かれの境界侵犯については第739行以下を参照。『ペルシア人』の政治的關係については、Meier (1988), pp. 76-93 (= Meier (1993), pp. 63-78)、Raaflaub (1988), pp. 284-86を参照。

この時は、ギリシア人を「僭主的な都市」、すなわち帝国アテナイの抑圧からギリシア人を解放するための闘いの声であった。スパルタの主張に対抗するため、ペリクレスも「もっとも偉大で、もっとも自由な都市」というアテナイのスローガンを作り出したにちがいない。ペリクレスの下で「自由」の範囲は拡大して完全な意味に到達し、ゆがめられて正反対の概念となった。つまり、「自由」が、帝国主義的抑圧の正当化にも利用されたのである。<sup>(7)</sup>

「わたしたち」はペリクレス時代のアテナイを、パルテノン神殿、パイディアスの彫刻、ソポクレスの悲劇、ヘロドトスの『歴史』、ソクラテスによる哲学の勃興によって特徴付けられる、文化と人文主義が栄えた偉大な「黄金時代」とみなす。当時のアテナイ人は瞠目すべき戦争での成功、前例のないほどに拡がった帝国、比類なき自由によって「偉大さ」を定義した。しかし、長く苦しい戦争を経た30年の後、アテナイは飢え、消耗しきって降伏した。アテナイは他国にふんだんに与えてきた破壊と隷属をまぬかれたが、帝国、艦隊、市壁をうしなった。歴史家クセノポンが報告しているように、「ペロポネソス側は笛吹き女たちの伴奏に合わせて、この日こそギリシアの地で自由が始まる日なのだ」と信じて、熱心に城壁を破壊し始めた。現代にいたる後世の歴史にあまりにもしばしばみられるように、この考えは幻であったとあきらかとなった。解放はまもなく別の抑圧的な体制を生み出す。今回はスパルタの抑圧である。<sup>(8)</sup>

これが本論の大枠である。まずは、アイスキュロス『ペルシア人』、とりわけサラミス海戦の闘いの声を引き金をひくことになったもうひとつのつながりからはじめて、枠組みを肉付けしていく。

## 2 ギリシアにおける政治的価値としての自由の発見

自由の政治的な価値を前面にもたらしたのは、あらゆる予想に反して、小さなギリシア諸都市が強大なペルシア帝国の侵入に勝利したという圧倒的な経験である。実のところ、奴隷制の出現以来、奴隷と対比的に自由人の地位を示す社会的価値として、人びとは自由を賞賛してきた。それは初期ギリシアの記録にもよくあらわれている。しかし、初期ギリシアの条件下では——あるいはほかのどの古代世界でも——自由な状態が「政治的な」自由の概念を喚起することはなかった。<sup>(9)</sup>

共同体内部では支配的な貴族が、伝統的にかれらが分け持っていた権力を維持しようとつと

---

(7) トウキュディデスによるペリクレス描写は、『歴史』第2巻第65章を参照。僭主的都市からの解放者というスパルタのプロパガンダについては、トウキュディデス『歴史』第2巻第8章、第1巻第122章、第124章、もっとも自由な都市としてのアテナイに関しては第6巻第89章第6節と本稿註33を参照。両者について、Raaflaub (2004)、第5章で論じられている。

(8) クセノポン『ギリシア史』第2巻第2章第23節(根本英世訳)を参照。「偉大さ」を定義するうえでのアテナイの優先権については Boedeker and Raaflaub (1998)、p. 1-10、ペリクレス時代については Samons (2007) を参照。

(9) 古代世界において政治的自由の概念が欠如していたことについては、Raaflaub (2004)、p. 4、Raaflaub (2009a)、pp. 50-51 を参照。とくにアルカイック期ギリシアにおける欠如に関しては Raaflaub (2003) と Raaflaub (2004)、第2章を参照。

め、互いに優劣を競いあっていた。貴族の中には、ギリシア人たちが僭主制とよぶ体制をうちたてて、権力を独占する機会をつかんだ者たちもいた。貴族たちの勢力争いの目的は、自由を再獲得することではなかった。このときの自由とは、たんに誰か他の人物によって支配されておらず、「不自由」ではないということの意味していたにすぎない。かれらがもくろんだのは、均質的な集団における権力と平等であった。それゆえ、かれら全員が以前は当然のものとうけとめていたひとつの価値観が、僭主制に対立するものとして際立った。すなわち、*isonomia* (平等) である。これは文字通り「平等な (*iso-*) 秩序 (*nomos*)」を意味する。法の前の平等、平等な分配、さらに平等な政治参加、政治的平等である。民主政下におけるすべての市民への漸次的な政治的権利の拡大をあらわすのに使われてきた平等は、この *isonomia* である。ヘロドトスは、民主政はあらゆるものの中でもっとも美しい名称 *isonomia* (政治的平等) をもっていたと述べている。自由はずっとあとになってとりわけ民主政に結びつけられたものであって、「平等な発言権 (*isēgoria*)」は、ギリシア人が「発言の自由 (*parrhēsia* 文字通りには「全員にむかって発言する権利」)<sup>(10)</sup>」という言葉を考案して以降も頻繁に用いられつづけた。

初期ギリシアにおける都市国家間において、戦争は頻繁かつ断続的にくりかえされ、ほとんどが係争地や戦利品を目的として遂行された。征服された係争地が、勝利者の領域に組み込まれたのであって、支配されることはなかった。都市国家間の関係で影響力を増加させるために活用されたもうひとつの装置が、覇権的同盟であった。これには、いわゆる「ペロポネソス同盟」というかたちで、とりわけスパルタが成功をおさめた。このような同盟システムは参加諸国に一定の軍事的義務を課し、指導国 (*hēgemōn*) には指導権と漠然とした強制権を委ねる。しかしながら、同盟組織はゆるやかで、活動範囲は共通の審議によって決定された協同の遠征に限定されていた。それゆえ、参加諸国の自治はほとんどそこなわれることはなかった<sup>(11)</sup>のである。

イオニアと呼ばれたアナトリア半島西岸の多くのギリシア諸都市が、前6世紀半ばにペルシア帝国によって征服された。それ以前には大帝国の地平線からへだたっていたギリシア人の間では、戦争や同盟の結果として恒常的に臣従する慣習はなかった。容易に想像されることだが、これらすべての理由から、ペルシア帝国に直面したことはおおきな衝撃であり、ギリシア人の認識と態度は永久に変わってしまった。実際、他の諸帝国とおなじく、臣従した人びとがふさわしい振る舞いをする限り、ペルシアの支配は比較的穏当なものであった。かれら臣下は貢納をおこない、大王の戦争に部隊を提供しなければならなかった。反面、かれらはきわめて広い範囲で自治を認められていた。しかしながら、ペルシア大王、総督、大王が小アジアのギリシ

(10) 初期ギリシアの国政上の用語は、「秩序」に焦点をあてている。*eu-nomia* (よき秩序)、*dys-nomia* (悪しき秩序) という具合である。cf. Meier (1990a), pp. 160-62. *iso-* の接頭辞で修飾される用語として、*isonomia* (平等な秩序、分配、参加ならびに法の前の平等)、*isēgoria* (平等な発言権)、*isokratia* (権力の平等) があげられる。Vlastos (1953)、ヘロドトス『歴史』第3巻第80章第6節をみよ。*parrhēsia* (*pan-rhēsia* 全市民にむかって発言する権利、発言の自由) については Raaflaub (2004), pp. 221-25、民主政と自由については、同第6章を参照。

(11) アルカイック期ギリシアの権力拡大については Raaflaub (1994), pp. 114-18、ペロポネソス同盟については Kagan (1969), pp. 9-30 を参照されたし。

ア諸都市を統治するように信任した人びとの権力、意思、言葉は絶対であった。クセルクセスの父ダレイオスは、首都近郊に位置する巨大な岩石に、かれに臣従する人びとの一覧を刻み、このように結んでいる。

ダレイオス大王の言葉。以上が余のもとに従うようになった国々である。アフラマズダ(最高神)のお恵みにより、このものたちは臣下となった。余に貢納を支払い、昼夜の区別なく余が命じたことを実行した。ダレイオス大王の言葉。これらの国々のなかで、忠義に篤い者、この者には余が十分な報いを与えた。邪悪なる者、この者には余が十分な処罰を下す。アフラマズダのお恵みにより、これらの国々は余の法に敬意を示した。余が命じたように、実行された。<sup>(12)</sup>

もちろん、これはギリシア人の慣習にはなかったものである。ペルシア帝国の支持でイオニア諸都市を統治した人たちは、現地の貴族出身者であったが、「僭主」とみなされた。前500年、イオニア人は反乱にたちあがり、わずか6年後に失敗におわった。反乱の口火をきった都市ミレトスは、それまで政治的・文化的にもギリシア世界の中で最先端に位置していたが、破壊され、住民は追放されてしまった。アテナイは当初この反乱を援助し、そのためペルシア帝国の怒りを買った。ペルシア戦争へいたる当初の前490年、アテナイとスパルタは、臣従の証として「土と水」を要求したペルシア人使節を殺害し、かれらを穴と泉に投げ捨ててしまった(大王にささげる土と水はお前たち自身で手に入れろ、と言ったところだろうか)<sup>(13)</sup>。かれらは征服されたならば、ペルシア帝国からどんな復讐が予想されるかわかっていた。前480年、クセルクセスが大軍を率いてギリシアに侵入したとき、アテナイ、スパルタ、当時同盟関係にあった諸国は、大王に抵抗したギリシア諸都市同盟の中核をなした。かれらは独立のみならず、生存をかけて戦った。勝利をおさめ、成し遂げた功績に考えをおよぼし、さらに、ペルシア帝国の支配下にあった共同体と自分たち自身の共同体との性質を比較したとき、かれらは独裁的な君主制と根本的に自由で平等なギリシア人共同体とのあいだの決定的な違いに気づかざるを得なかった。ギリシア人はこのすべてを表現する概念を必要としたのである。そのため文字通り言葉として、そして概念として「自由」を発明した。戦争期間中、かれらは最高神ゼウスの助力を、救済神(*Sôtēr*)としての機能に求めた。戦後、救済神ゼウス(*Zeus Sôtēr*)は、解放神ゼウス(*Zeus Eleutherios*)と名を改められた。前480年におこなわれた合戦を記憶する詩のなかで、詩人ピンダロスは、「輝かしい自由の土台」を据えたことでアテナイを祝った。前478年、同詩人は、名詞の自由(*eleutheria*)をはじめて使用した。ギリシア人はペルシア戦争以前にはそ

(12) ギリシア人にたいするペルシア帝国の支配については Briant (2002) と Balcer (1995) を参照。ダレイオス大王のベヒストゥン碑文は Kent (1953) で論じられている。

(13) イオニア人僭主については Graf (1985)、イオニア反乱については Murray (1988)、「土と水」については Kuhrt (1988) をそれぞれ参照。ペルシア人使節団に関しては、ヘロドトス『歴史』第7巻第133章で叙述されている。

のような名詞を必要としなかったが、いまや必要となったのである！<sup>(14)</sup>

ヘロドトスはいつもながらのいきいきとした逸話のなかで、もっとも重要な点を要約している。かれが伝えるところによれば、2人のスパルタ人使節が、母国スパルタがペルシア人使節を殺害した罪をかれらの命で購うために、ペルシア帝国首都へ派遣された。道中、あるペルシア人総督が大王に臣従し、友人となって、よろこんで報いを下さる大王の寛大さを利用して、ペルシア帝国で権力者の地位を享受するようかれらに勧めた。これにスパルタ人使節が応えて言うには、「われらに対するあなたの御忠告は片手落ちと申すものです。御忠告下さるあなたは、なるほど一面のことは経験済みでおられるが、別の一面のことは未経験でおいでになる。すなわち、奴隷であることがどういうことかはお存知であるが、自由ということについては、それが快いものか否かを未だ身をもって体験しておられないのです。しかしあなたが一度自由の味を試みられましたならば、自由のために槍だけではない、手斧をもってでも戦えとわれらにおすすめるに相違ありません」。ギリシア人はペルシア人の「臣下 (*bandāka*)」の概念を理解できなかった。たんにかれらはその言葉を「奴隷 (*doulos*)」と訳した。ギリシア人の観点では、大王の絶対的権力と比較すれば、ペルシア帝国でもっとも高い地位にある人物でさえ奴隷でしかなかった。<sup>(15)</sup>

### 3 戦争、帝国、民主政

勝利の幸福はまもなく紛争と敵対心をうみだした。戦後のスパルタ人とアテナイ人の目的は異なっていたのである。スパルタは戦争が終わり、協同の戦争活動から手を引くことになると信じていた。アテナイはふたたびペルシア帝国が征服を試みるのではないかと恐れており、ペルシア帝国から離脱したイオニア人によってうながされて、新同盟を創設した。同盟の中心はデロス島であった。これ以降の同盟をわたしたちは「デロス同盟」と呼んでいる。同盟諸国はデロス島で評議会を開催し、共通の問題に関して決定を下した。同盟諸国は共通の金庫に資金面で貢献をするか、協同しておこなう遠征に戦艦を拠出した。同盟諸国中最大の勢力を誇ったアテナイは、議論の余地のない指導国であった。当初同盟は、すべての同盟諸国が等しい権威を与えられるという原則に従って活動していた。<sup>(16)</sup>

20年もたたないうちに、この同盟は完全に異なる、ギリシア世界で前例のないものへと変

(14) 用語 *eleutheria* (自由) の使用は、ピンダロス『イストミア祭祝勝歌』第8歌第10-16行を参照。Snell-Maehler fr. 77を参照。自由の発明、救済神ゼウスから解放神ゼウスへの改名については、Raaflaub (2004)、第3章を参照。

(15) このスパルタ人使節の逸話は『歴史』第7巻第135章(松平千秋訳)で記述されている。ギリシア人がペルシア帝国の最高位官を奴隷とみなしていた点については、ダレイオス大王が総督ガダタスへ当てた手紙のギリシア語翻訳 (Fornara (1983), p. 37, no. 35) を参照。「王の中の王ヒュスタスペスの子ダレイオス大王が、奴隷ガダタスへ伝える…」という行がある。ペルシア語の「臣下 (*bandāka*)」については、Briant (2002), pp. 324-25を参照。

(16) デロス同盟からアテナイ帝国への変質については、Meiggs (1972) と Rhodes (1992) を参照。

質した。アテナイ帝国である。楽観主義、アテナイの野心、同盟諸国の一部による注意力不足や積極的な関与の欠如が、この変化の主因となった。船よりも金銭を抛出するほうがより安上がりで簡単であり、アテナイは艦隊を建造し戦艦に人員を配備するためにその金銭を用いた。そのためアテナイはより強大となり、同盟諸国はより弱体化していった。参加国は説得と強制によって数を増していき、同盟を離脱しようとする試みは反乱とみなされ、情け容赦なく抑えつけられた。結果的に、評議会の開催場所と金庫はアテナイにうつされ、同盟評議会は無視され、アテナイ民会がその場所で同盟のための意思決定と立法をおこなうようになった。結果は、アテナイの鉄拳と艦隊によって支配され、ますます中央集権化していく帝国であった。<sup>(17)</sup>

軍事的には、アテナイ帝国は継続的に戦争の準備をすすめることを必要とした。実際、ペルシア戦争後の期間、アテナイは3年毎に2回の割合で、なんらかの戦争に関与した。70年以上もの期間、エーゲ海周辺域とそれ以遠にひろがった約200もの共同体を支配した権力構造は、5万から6万の人口規模をこえることのなかった市民団が、継続的に軍事活動をおこなうことによって維持されていたのである。ペリクレスによるものであるとトゥキュディデスが伝える演説で、かれはこの業績に賛辞を送っている。ペロポネソス戦争初年（前431年）戦死者のために催された国葬演説で、ペリクレスはアテナイ人の3世代を称賛している。（ペルシア戦争で）自由を守り抜いた父祖の世代、血と労苦で帝国を築きあげた父たちの世代、「平時と戦時において完全に自足した手段でもってわれらが帝国の勢力を増大させ、われらの国家を形作った」（第2巻第36章）現行の世代である。

2年後、アテナイが疫病と田園地域におけるスパルタの略奪によって苦しんでいるとき、ペリクレスはアテナイ人の士気を回復させるために、さらに耳あたりの良い言葉を用いた。

思い出すのだ。全世界でアテナイがもっとも偉大な名をもつのは、決して逆境にくじけることがなく、ほかのどの国よりも多くの生命と労力を戦争に費やしたからなのだ。そのため、史上類を見ないもっとも強大な勢力を勝ち取ったのである。そのような勢力は後世の人びとによって永久に記憶されるだろう。… [では後世の人びとは実際に何を記憶するだろうか]。それは、あらゆるギリシアの勢力の中で、われらはギリシアを覆うもっとも広大な支配地を保持したこと。われらはもっとも大きな戦争に直面しても動じることがなかったこと。[そして]、われらは完全にあらゆる面でもっとも豊かで、ギリシアでもっとも偉大な都市に住んでいることだ。（第2巻第61-64章）

ここでも再び、戦争と勝利、同盟軍への犠牲を基準に——遠慮なくいうと同盟の栄光のために1人当たり流された血の量を基準に——偉大さが定義されている。そしてその血の量は膨大であった。前460年の1年間、10部族（都市の下部組織）の中の1部族だけで、キュプロス島、エジプト、フェニキア、ギリシアで戦死した177人の犠牲者を記録している（これは成人

---

(17) アテナイ帝国については Meiggs (1972) と Schuller (1974) を参照。

男性のおよそ3.5-4.5%に相当する)。前450年代、ペルシア大王からの離反を支援するためにおこなわれたエジプト遠征では、成人男性市民の7人に1人に相当する8,000人の犠牲者、前415-前413年のシチリア遠征失敗で少なくとも10,000人、ペロポネソス戦争全体をとおして28,000人の犠牲者を出した。ペロポネソス戦争終結時には、市民人口は開戦前の半分以下にまで落ち込んだ<sup>(18)</sup>。もしこの割合を自国の人口にあてはめてみれば、この数値の意義が理解できるだろう。第2次世界大戦の犠牲者数を大幅に超えた割合となる。

戦争は市民の生活でおおきな役割を演じていた。現存する史料は、さまざまに戦争での成功と失敗によってひきおこされる興奮と強烈な失望を例示してくれる。アテナイ人たちは、若年から老年まで戦争とそれによって獲得される帝国を、必然かつ適切であり、さらに望ましいものであると考えることに慣らされていた。たとえば、アゴラには3つのヘルメス柱像、すなわちヘルメス神の頭部をそなえた柱が立っていた。そこに刻まれた詩は、前476年アテナイのペルシア帝国に対する戦勝を称えている<sup>(19)</sup>。そのうちの2句を引用しよう。

ここに立つのは、アテナイが自国の指導者たちにおくる賛辞  
かれらの雄々しい行動によって激戦を制した勝利への敬意  
後世の人びとはこれを読み、この記念碑から勇気を得て  
かれらの故国のため、おなじく勇敢に戦争へと行進していくのだ…

これ以上にはっきりと表現されたメッセージはない！ 若き市民たちは父祖たちを模倣し、「祖国のため、おなじく勇敢に戦争へと行進していくのだ！」100年前、この理念がヨーロッパを第1次世界大戦へと導いていった。

政治的に、アテナイ帝国は1都市国家、あるいはむしろギリシア人自身が気づいていたように、ひとつの市民団国家の市民によって集散的に運営されていた。「人間が都市である！」とトゥキュディデスの『歴史』で、あるアテナイ人将軍は発言している。さらに、かれらの帝国構造との緊密な相互作用において、アテナイ人は古代世界のなかで想像可能なもっとも急進的民主政を発達させた。これは世界史上最初の事例であった<sup>(20)</sup>。帝国は通常君主によって征服され統治される（キュロス大王、アレクサンドロス3世、シャルルマーニュを思い出してほしい）。例外としては、ローマのように、貴族によって統治されることもある。それと比較して、アテナイ帝国はもっとも異例であった。

アテナイ人自身も、帝国と民主政とのつながりによく気づいていた。前430年ごろ、とある反民主政的人物が、顕著な矛盾を説明しようと試みた。かれは属する都市の民主政の基盤と

(18) アテナイの被害については Strauss (1986), pp. 179-82、Hansen (1988), pp. 14-28。

(19) アイスキネス『第3番弁論』第183-5節。アテナイにおける戦争の役割については、Meier (1990b)、Hansen (2001)、Raaflaub (2001)を参照。

(20) 帝国と民主政については Raaflaub et al. (2007)、第5章 “The men are the city”、トゥキュディデス『歴史』第7巻第77章第7節を参照。アテナイ民主政一般については、Bleicken (1994)、Hansen (1999)を参照。

なった諸原理は卓越した思慮を生み出したのだが、すべての思慮ある人びと——貴族を意味する——は、民主政が「愚か者たち」、すなわち貧しく無教養で、非合理的で道徳的に劣った下層階級に権力を与えるので完全に不合理な制度であることを知っているという矛盾である。そうであったとしても、かれはこのように認識する。

船に乗り込むのは民衆であり、重装歩兵、貴族、よりすぐれた階級の人びとよりも、多くの権力を都市に付与するのであるから、貴族、富裕者よりもただアテナイの貧者と民衆（*demos*）のほうがまさっているのは当然である。そうであるので、すべての市民に公職に就任することを許し、望むのであればいかなる市民にも発言を許すのは<sup>(21)</sup>ただしい。

市民の軍事的能力を政治的権利に結びつけるこの発言は、民主政に実際的な正当性をあたえる。同じころ、ヘロドトスはペルシア戦争をあつかった大歴史叙述に取り組んでいた。前6世紀における僭主追放後のアテナイの勝利について言及するとき、かれは平等と自由の意義を強調する。

それゆえアテナイ人は… [発言の] 平等、[すなわち民主政] がいかに気高いものであるかを…証明した。というのもアテナイが独裁下にあったときには、かれらは近隣のどの国をも戦力で凌ぐことができなかった。しかし、ひとたびくびきから解き放たれば、断然他を圧して最強国となったからである。これによって見るに、圧政下にあったときは、あたかも奴隷が主人のために働くことを避けるかのごとく、かれらは意図して戦場での義務を避けていたのだ。しかし、自由を勝ち取ったとき、かれら全員がみずからの問題であるかの [ように、共通の問題に] 関心を抱いた。(第5巻第78章)

成功による正当化は実際、民主政を支持するもっとも強力な議論である。そして民主政の成功をもっとも強力かつ顕著に体現したのが、帝国であった。好むか好まざるかにかかわらず、西洋史における最初の帝国は民主政の都市によって創造された。もうひとつの興味深い矛盾である！

アテナイの指導権と支配を正当化した理念は、アテナイがペルシアによる隷属化を妨げ、全ギリシアの自由を救うために最大の貢献をしたという主張と、アテナイがペルシア帝国と、帝国が課す僭主制に抵抗してギリシアの自由を守り続ける、という約束に基づいていた。この2つの点で、理念は決定的に自由由来していたのである。

---

(21) 伝クセノポン『アテナイ人の国制』第1章第2節 (Bowersock (1968)、Moore (1975)、Osborne で現代訳を参照可能。邦訳として、松本仁助訳『小品集』、京都大学学術出版会、2000年が参照できる)。

#### 4 自由と帝国主義

トゥキュディデスが伝えるところによれば、前432年、スパルタと同盟諸国が、アテナイと開戦すべきかどうかを議論していたとき、アテナイ人使節団がスパルタ民会にあらわれた。かれらが言うには、アテナイは自らの状況にふさわしくない行動は一切とってきたこともなければ、あるいは、スパルタを含む他国が同じ状況に置かれたときにしなかったようなことをしたこともない。とりわけ、アテナイは Marathon でペルシア帝国を一撃の下に破り、サラミスではもっとも多くの戦艦、もっとも輝かしい将軍を提供し、屈することなき勇気を示したがために、アテナイが権力ある地位に昇ったことは当然であり、完全に正当化された。共通のギリシア人の利益のため、かれらは自らの都市を犠牲とし、あらゆるものを危険にさらしてきた。もしかれらがそうすることを拒否し、ペルシア帝国と取引したのであれば、ギリシアの運命は定まっていたであろう。このようにアテナイ人使節団は述べた。ここで2点が注目に値する。ひとつはギリシアの自由を守ったという主張、もうひとつがこの主張からアテナイが導き出した政治的、理念的な結果である。

アテナイ人は頻繁にペルシア戦争におけるかれらの貢献に言及した。そのため、これは「故事」となり、人びとがいつも聞かされてうんざりするほどとなっていた。<sup>(22)</sup>ところで古代社会においては、恩恵を受けたならば義務が課されることが一般に受け入れられていた。そのため、アテナイが自国の貢献の見返りとして名誉をうけ敬意を払われることを期待したのには相応の理由があった。アテナイがペルシア戦争で主要な軍事力として台頭したため、「デロス同盟」の内部において指導権を要求することにも等しく議論の余地がなかった。問題が発生したのは、アテナイがこの正当化を同盟諸国内での支配権のみならず、帝国支配にまで拡大していったときのみであった。自由への貢献を解放された諸国の帝国支配を正当化するために用いたこと、これこそが反発を生み出した。アテナイが帝国支配を固め拡大していくにしたがって、さらに反発も大きくなっていった。これこそがアテナイが僭主的な都市と非難された原因であった。そしてこの根拠こそが、ギリシア人の自由の求めを、ペロポネソス戦争において、スパルタの「自由への関の声」（大義名分）とした。

ヘロドトスはこの問題をよく理解していた。『歴史』の前480年クセルクセスがまさにギリシアに侵攻しようとする行で、かれは次のように叙述している。

さてここでわたしとしては、必ずや大多数の人びとの不興を買うであろう見解をどうして

---

(22) 「故事」については、トゥキュディデス第1巻第73章に「しかしながらペルシア戦争や諸君自身に関知している他の事件については、繰り返し聞かされる諸君にとっては迷惑ではあろうが、やはり語らざるをえない」（藤縄謙三訳）、第5巻第89節には「自分たちがペルシアを打ち負かしたのだから支配者の座に就くのは正当な権利であるとか、あるいはこうして攻めて来たのは不正行為を被ったことへの返報にすぎないとか、そんな美しい名目を掲げて、しよせん信じてもらえないような演説を長々と繰り返すつもりはない」（城江良和訳）とある。

も述べねばならない。…もしアテナイ人が迫りくる危機に怯えて祖国を放棄していたならば——、またもし放棄しなかったとしても留まってクセルクセスに降伏していたとすれば、海上でペルシア王を迎え撃たんとする者は皆無であったろう。そしてギリシア艦隊がいなければ、[ペルシア軍は容易にギリシアの他地域を制圧してしまったであろう]。かくてアテナイがギリシアの救世主であったといっても、それは真実の的をはずれたものとは決していえぬであろう…そしてギリシアの自由を保全する道を選び、ペルシアに服せずに残ったあらゆるギリシア人を覚醒させたのは、アテナイ人だったのである。

(第7巻第139章、松平千秋訳[以下同]、一部改訂)

それゆえ、アテナイ人はギリシアの救済者で「あった」。ヘロドトスは後段で、この点についてわたしたちを納得に至らせてくれる。前479年、ペルシア帝国将軍マルドニオスが、ギリシア本土で大軍を率いて出発し、陸上での遠征を再開する箇所である。かれは敵を分断し、アテナイ人をペルシア側に寝返らせようと試みる。条件のよい同盟条約をアテナイ人に提示し、支配したいギリシアの領域を選ぶようにと持ちかけている。そのためアテナイ人は同盟諸国を犠牲として、自らの自由を保ち権力を手にする機会を得たのである。

おおいに警戒したスパルタ人は、アテナイ人自身の理念を引き合いにだしながら、マルドニオスの提案を受け入れないよう頼み込んだ。

「古来かわることなく多数の人間の解放者として知られる貴国アテナイが、ギリシアの奴隷化の因を作られることはわれわれの耐え難く思うところである」(第8巻第142章)、と。

アテナイ人はペルシア人使者に次のように返答した。

「ペルシア王にわれわれに数倍する力のあることは、われわれ自身もよく心得ているところであるから、あらたまってそのような不快なことをいって貰う必要はない…従ってペルシア王との講和については…われわれとしてもそなたに説得されるようなことはない。さあ、マルドニオスにアテナイ人の言葉として復命されるがよい、太陽が現在と同じ軌道を進む限り、われわれはクセルクセスと和を講ずることはない。」(第8巻第143章、一部改訂)

かれらはスパルタ人使節にはこのように返答した。

「アテナイ人の心情を知悉し、世界中の黄金をもってしてもまた秀美豊沃に冠絶した領地をもってしても、われわれの心を動かしてペルシアに加担しギリシアの奴隷化を望むようにしむけることはできぬ…」(第8巻第144章)

それはなぜか。ギリシアの神殿を破壊したペルシアに復讐する共通の義務、血族、言語、信仰、慣習をともにするギリシア人の共同体が、その理由であった。

「アテナイ人がこの同胞を敵に売るようなことは許されることではあるまい。」(第8巻第144章) たしかに、許されること「ではなかった」。この対比はおさまりが悪い、意図的なものである。ヘロドトスが『歴史』を記述していたとき、アテナイはペルシア帝国と和平を結んで「しまっていた」し、ペロポネソス戦争の初期段階では、スパルタにたいしてペルシア帝国に援助を求

めもしたのである。<sup>(23)</sup> 解放者は抑圧者となり、ギリシアの救済者は僭主になってしまっていた。

アテナイ人はどのようにして、この否定的な政策の食い違いに折り合いをつけたのだろうか。かれらはほとんど意に介さなかったのである。実利主義と現実主義が道徳的問題に優越していた時代であったように思われる。このふたつは、楽観主義と人間の可能性と進歩へのほとんど制限のない信頼によって支配されていた。利用可能な資源を注意深く評価することで、ペリクレスは確信と自信をもって大戦でさえも見積もり、計画することができると考えた。<sup>(24)</sup> 仲間の市民たちはずっと高揚状態にあり、権力の興奮に酔いしれていた。かつての成功が、アテナイ人の集合的な、すなわち「国家的な」性格を形作ってしまっていた。かれらのトレードマークは「たかさんのことを実行する (*polypragmosynē*)」であった。究極的な「活動家」、発明家であり、のろまで用心深く融通の利かないスパルタ人の対極となっていた。かれらはさらなる利益をもとめて絶えず出かけていき、決断と行動に敏く、極端な自信家、忍耐強い人びとであった。仇敵コリントス人は「かれらは平和と静寂よりも、難局と活動を好む。一言でいえば、生まれながらにして、かれらは静かな生活をおくることもできず、他の人たちが静かに生活をおくるのを許すこともできないのだ」と語る。<sup>(25)</sup>

アリストパネスの喜劇『鳥』が示すように、帝国建設がアテナイ人にとってあまりに自然なこととなっていたため、2人のアテナイ市民は過度に政治が浸透しすぎた都市の激論と法廷から逃亡して、鳥の牧歌的な世界に逃げ場をもとめた。にもかかわらず、まもなく新たな主人である鳥をさそって天空の帝国を建設させてしまう。かれら2人はこれによって、人間のみならず神々をも支配することが可能となってしまう。<sup>(26)</sup> 喜劇の最後には、かれらの指導者となった平均的なアテナイ人が、ゼウスに女神バシレイア（世界の女王）を譲渡するように強いる。かれはすぐさま女神と結婚し、究極的な幻想を満たす——ジークムント・フロイトならこれで大饗宴をくりひろげることだろう——。これと対比して、受動的で、関わりをもとうとしない市民は、共同体にとって基本的に無価値であった。

さらに、スパルタ人の道徳的立場はアテナイを批判するには脆弱だった。以前の条約でかれら自身が、アテナイの影響圏内に生きる人びとを管轄するのは、ほかならぬアテナイであると認めてしまっていた。スパルタの同盟諸国がどんなに不平をもらそうとも、アテナイ人はこの条約をやぶったことはないとして主張したし、後にスパルタ人はおそらくこの事実を認めたであろう。戦争中何度か、スパルタ人は同盟諸国とギリシア人の自由に目をつむって、現

(23) ペルシアとの和平については Bengtson (1975), pp. 64-69, no. 152、Fornara (1983), pp. 97-103, no. 95、Lewis (1992a), pp. 121-27 を参照。ペルシア帝国への援助要請については Lewis (1992b), p. 421 を参照。

(24) トウキュディデス『歴史』第1巻第140-44章、第2巻第13章。アテナイ人の「能力への自覚」については Meier (1990a), pp. 186-221 を参照。

(25) アテナイ人の集合的な性格として「行動主義と多くを実行すること (*polypragmosynē*)」についてはトウキュディデス『歴史』第1巻第70章を参照。アテナイ人の活動的市民と受動的 (*apragmōn*) 市民の概念については、トウキュディデス『歴史』第2巻第40章、第61章、第64章、Carter (1986)、Raaflaub (1994)、Christ (2006)、Demont (2009) をそれぞれ参照。

(26) アリストパネス『鳥』で描かれる帝国建設への熱意については Konstan (1995), pp. 29-44、Konstan (1997) を参照。

状維持の条件で和平を締結しようとした。アテナイが隣国メガラに対する通商禁止措置を放棄することに同意さえすれば、戦争を全面回避できた可能性もあった。この点を強調することで、トゥキュディデスはスパルタの「自由への関の声」がプロパガンダの道具であったと明らかにしている。問題であったのは、スパルタの私利私欲のみであった。この点で、スパルタはアテナイと同類<sup>(27)</sup>だった。

このように、アテナイ人は2重の戦略を追求したのである。外部にむけては、かれらはスパルタを訪問したアテナイ人使節団の発言に代表されるような立ち位置をとった。アテナイはなんら不正をはたらいてきておらず、自分自身の自由を守らねばならなかった、という主張である。かれらは仲裁を受け入れるよう提案し、最後通牒のかたちで提示された要求に従うのを拒否した。そうすることは隷属することであり、自由人や自由な都市の名誉にはそぐわなかった。「なぜなら、対等の相手から裁判を経ずに隣国人に突きつけられる要求は、事の大小を問わず、要するに奴隷化を意味するからである」(トゥキュディデス『歴史』第1巻第141章、藤縄訳)とペリクレスは主張した。興味深いことに、悲劇詩人エウリピデスは、しばし自国の政策や指導者に批判的ではあったが、このペリクレスの主張に同意していたようである。同時期、かれは『ヘラクレスの子供たち』という悲劇を作成した。そのなかに、同種のメッセージがこめられている。作中エウリュステウスは、英雄ヘラクレスの死を布告する伝令にたいして、アテナイの領域に庇護を求めてきた英雄の子供たちを引き渡すよう要求し、応諾がなければ開戦するとの脅しで最後通牒を突きつけている。これに対してアテナイ人代表はこのように返答している。

もしこの祭壇を異国人の手で略奪されるのを許したならば、  
わたしは自由な国を統治していることにならないと思うし、  
わたしはアルゴス人を恐れてやってきた嘆願者を裏切ったこととなろう。

(第243-46行。第284-87行も参照)

ペリクレスは葬送演説のなかで次のように強調している。「(われわれは)こちらから親切を実行して、友人を得るのである…またわれわれのみが利益の打算によらずに、むしろ自由人への信頼に基づいて、恐れることなく人びとを助けようとするのである。」(第2巻第40章、藤縄訳)これが本心であったとしても、その時アテナイ人はかれらの根拠が正当であり、それゆえ神々が味方についてくれるであろうと説得されたはずである。

他方で、アテナイ人はかれらの都市が帝国におよぼす僭主的支配を批判する外部からの声にたいしては、自分たち自身の自由の理念を用いて反論した。迫られれば、論争のうえでは、アテナイ人の指導者たちさえも、僭主的支配についてはしぶしぶながら認めたであろう。ペリク

---

(27) 前446年の和平条約については Bengtson (1975), pp. 74-76, no. 156、スパルタの譲歩についてはトゥキュディデス『歴史』第7巻第18章、和平提案については第4巻第15-41章、メガラについては第1巻第139章。スパルタのプロパガンダとしての自由への関の声については Raafflaub (2004), pp. 193-202 を参照。

レスは最後の演説でこう述べている。「諸君は既に帝国を僭主制として握っているのであって、それを獲得したことが不正と思われるにしても、手放すのは危険なのである」（トゥキュディデス『歴史』第2巻第63章。第3巻第37章も参照）。しかし、より積極的な観点がなおのこと好ましかった。それゆえペリクレスは、先に引用した演説において、このように主張する。すなわち、われらはいかなるギリシア人のポリスもかつて手に入れたことのないような絶大な権力を勝ちえ、ほとんどの戦いに勝利し、前例がないほど多数のポリスに支配をおよぼしてきたがゆえに、われらをもっとも偉大な名をもつ。「われわれは賞賛者としてホメロスも、また詩歌をもって当座の娯楽は与えるものの真相によって真実についての憶測を打破されてしまうような人びとも、必要とはしない。むしろわれわれは全陸海をしてわれわれの武勇に接せしめ、至るところに禍福両方の永遠の記念碑を建てたのである」（第2巻第41章、藤縄訳）。

もっとも偉大な都市であるとの主張は容易に理解することができる。さらに、ペリクレスは同時代のアテナイ人たちが「あらゆる点で完璧に準備ができて」おり、「戦時においても平時においてもまったく自足した存在で」（第2巻第36章）あったと主張する。そのため、アテナイの自己表現は完全な自足（*autarkeia*）の概念を含んでいた<sup>(28)</sup>。では、どのくらい真実でありえたのだろうか。

ほとんどの古代の作家は、自足は賢明で不足する要素をもたない神々のみが達成できる理想であると同意している。共同体でさえ、需要を満たすために他の共同体に依存している。しかし、トゥキュディデスの『歴史』で語られるペリクレスによれば、アテナイ人はふたつの方法でこの限界を突破していた。ひとつは、個人は、自足した個人（*sōma autarkes*）となるために、個性と多才で自立した美德を自由に発達させるための最良な状態を、都市において、そして都市をとおして見つけることができる<sup>(29)</sup>。共同体としては、アテナイはより大きな存在、帝国の境界さえをも越える外の世界に依存しているにもかかわらず、アテナイの権力によって、確実にあらゆる需要が永続的に満たされることを保証することができた。それゆえに、アテナイは自足しているのである。このように、自足（*autarkeia*）の概念は、輝かしくも、勝利者の特徴を与えられることになった。それは並外れた、ほとんど超人的な、そして事実上究極の自己決定能力という特徴である。それは、これまでたったひとつの都市のみが達成することができ、「もっとも自足した都市（*autarkestatē polis*）」という最上級形において、アテナイの偉大さ、支配、そして完全な独立を射程に収めていた。

ここでふたつの問題に言及したい。ひとつは、支配的な都市によるこのような自足状態の独占は、必然的に従属する諸都市に厳しい制限を課すのと同義であるということである。エーゲ海交易がアテナイの港ペイライエウスに集中し、アテナイが海上貿易と交通をコントロールし

---

(28) 政治的概念としての自足については Raaflaub (2004), pp. 184-87 を参照。

(29) トウキュディデス『歴史』第2巻第41章におけるペリクレスの演説には、「わたしの意見では、われら市民はひとりであっても、人生の多数の局面で自己を自足した人間（*sōma autarkes*）であると証立てることができ、さらに比類なき高潔さと多芸に秀でることで、これを実行することができる」とある。

ていたことを考えるだけでよい。悪名高いメガラにたいする海上封鎖が顕著な例である。<sup>(30)</sup>第2の点は、アテナイの要求は抵抗なしには受け入れられなかったことである。これは当然予測されることだが、同時代の歴史家たちによって確認されてもいる。トゥキュディデス自身は、戦争初期にアテナイを襲った大疫病を叙述する中で、どこにも自足した人物 (*sōma autarkes*) はみあたらなかったと認めている。<sup>(31)</sup>トゥキュディデスは、より大きな効果をもたせるために、理想的共同体として民主政アテナイを称賛する高尚なペリクレスの葬送演説のすぐ後に疫病の被害を叙述している。この疫病はペリクレスの葬送演説で語られた理念の空虚さを明らかとするのである。恐ろしい危機に直面し、社会化とすばらしい市民組織という虚飾が剥がれ落ち、生々しい動物的な人間の姿が現れている。賢者(ソロン)が、世界でもっとも富裕な人物(有名なリュディア王クロイソス)に応答する場面で、ヘロドトスは次のことを指摘している。

人間の身としてすべてを具足することはできぬことでございます。国にいたしましても、必要とするすべてが足りているようなところは一国たりともございませぬ。…一番沢山ある国が、もっとも良い国ということなのでございます。人間にいたしましても同じことで、一人一人の人間で完全に自足しているようなものはおりません。あれがあればこれがないと申すわけで、できるだけ事欠くものが少なくて過ごすことができ、その上結構な死に方のできた人、王よ、さような人こそ幸福の名をもって呼ばれて然るべき人間とわたしは考えるのでございます。(第1巻第32章)

トゥキュディデスと同じく、ヘロドトスも強調するのは、どの人も、どの国も自足できないことである。このように狙いを定めた反論は、ペリクレスの法外な主張が本物であったことを確認するものである。

最後に、アテナイ人たちが自らの都市をあらゆる都市の中でもっとも自由な都市と呼んだことは不思議ではない。後世にアイスキュロス作と伝えられる『縛られたプロメテウス』を作詩した詩人は、アイスキュロスの同時代(前430年代)に活動しており、自身の悲劇登場人物にこのように発言させている。「なんでもみんな厄介ごとでさ、神々を支配すること以外は。だって、ゼウスのほかには、自由な者というのはないのですからね」<sup>(32)</sup>(第49-50行、呉茂一訳)。つまり、神々を支配する王ゼウスのみが、真に自由なのである！アテナイ人も同様である。他国にたいするかれらの権力と支配が共同体の内と外で自由を保障していた。さらにかれらは決定的な一步を踏み出した。かれらは国内の規範(民主政における規範)を外的な支配(帝国に

(30) 「メガラの海上封鎖決議」については、トゥキュディデス『歴史』第1巻第67章、プルタルコス『ペリクレス伝』第29章以下、de Ste. Croix (1972), p. 225ff., Hornblower (1991), pp. 110-112 を参照。ペイライエウスとエーゲ海貿易の中心としての役割については、Garland (1987)、Raaffaub (1998), pp. 22-26 を参照。

(31) 「いかなる肉体的状態も疫病に抵抗するに充分ではなかった(自足した人物はいなかった)」(トゥキュディデス『歴史』第2巻第51章)。

(32) 悲劇上演年代の推定については Griffith (1983), pp. 31-35 を参照。

おける支配)と結びつけて、包括的な権力と支配の「超概念」を作り出し、これを自由とつなぎ合わせたのである。アテナイ市民団は、アテナイ国内では民主政をとおして統治し、帝国の領域ではアテナイをつうじて、最高かつ絶対的な自由を享受した。この概念は、最上級の「もっとも自由な都市」という言葉によってのみ、表現されることができた。トゥキュディデス『歴史』において、2人のアテナイ人指導者が、この言葉を用いている<sup>(33)</sup>。

しかし宣言するだけでは十分ではない。まさにこのころ、アテナイ人はアゴラに壮麗な列柱廊 (*Stoa*) を新たに建造した。かれらは列柱廊を勝利の女神たち (*Nikai*) の像で飾り、ペルシア戦争でギリシアの自由を守護した神である解放神ゼウスに捧げた<sup>(34)</sup>。これ以上に挑戦的な態度は想像しえない。敵たちが、アテナイは僭主的な都市であると声高に非難を浴びせ、スパルタがギリシア人の解放のため戦争を準備していたときに、アテナイは自国を解放神ゼウスの庇護下に置き、まさにギリシア人にたいする支配を基盤として、もっとも自由、もっとも偉大、もっとも自足した都市という誇らしげな主張をこの建造物において象徴化したのである。

さらにまた、支配的権力によるこのような自由の独占は、もっとも厳しいかたちでも、他者の「奴隷化」をもたらしたことが明らかである。実際アテナイはペルシア大王の後釜にすわった。一例として、詩人エウリピデスはためらうことなく、もっとも悲劇的な演目である『トロイアの女たち』の舞台上、アテナイ人たちがとった政策の結果を劇的に表現した。クセノポンが書き残しているように、前404年敗北と飢えで降伏したアテナイ人たちは、「何をすべきか途方に暮れていた。かつて小国の市民に対して、報復を目的とした行為ではなく、その者たちがラケダイモン側に味方して戦ったというただそれだけの理由で、傲慢さゆえになした仕打ちを、今度は自分たちが蒙る番だとかれらは思っていた」(『ギリシア史』第2巻第2章第10節、根本訳)。このことをわたしたちは忘れることができない。

## 5 結論

要するに、アテナイは、人類史上文化的な功績においてもっとも偉大な一時代の栄えあるゆりかごであった。ペルシア戦争におけるギリシアの自由の救済者であり、民主政の発明者であり、今日のわたしたちの社会でも支配的となっている社会的価値(とりわけ自由と平等)をシステムとして発達させた。他方で、このアテナイはこれら社会的価値を悪用する方法も示した。自由世界における覇権を帝国に転換させ、自国の利益に供するように他国に民主政体を課し(こ

(33) 「もっとも自由な都市」としてのアテナイについては、トゥキュディデス第7巻第69章の記述において「[ニキアスは]どこよりも自由な祖国と、そこですべての市民に許された束縛のない生活を思い起こさせ…」とあり、第6巻第89章では「われわれ一族は市民全体の代表として、わが国家が最高の繁栄と自由 (*megistē kai eleutherōtatē*) を享受したときの体制を維持し、伝統を継承することを自らに義務として課した」とアルキピアデスが語る行がある(ともに城江訳)。アテナイの絶対的な自由概念については Raaflaub (2004), pp. 181-93 を参照。

(34) 解放神ゼウスの列柱廊については Travlos (1971), pp. 527-33、Camp (1986), pp. 105-7 を参照。

の側面は本稿で論じなかった)、搾取と抑圧を正当化する手段として自由を用いたのである。<sup>(35)</sup>  
このすべてがわたしたちの時代にどれだけ大きな意味をもつのかを強調する必要はないだろう。古代史は考えるためのよい材料となる。

#### 【引用参考文献】

- Balcer, J. M. (1995), *The Persian Conquest of the Greeks, 545-450 BC.*, Konstanz.
- Bengtson, Hermann (ed.)(1975), *Die Staatsverträge des Altertums, II: Die Verträge der griechisch-römischen Welt von 700 bis 338 v. Chr.*, 2<sup>nd</sup> ed., München.
- Bleicken, Jochen (1994), *Die athenische Demokratie*, 2<sup>nd</sup> ed., Paderborn.
- Boedeker, Deborah, and Kurt A. Raaffaub (eds.)(1998), *Democracy, Empire, and the Arts in Fifth-Century Athens*, Cambridge MA.
- Bowersock, G. W. (1971), *Pseudo-Xenophon, Constitution of the Athenians*, in E. C. Marchant (ed.), *Xenophon, VII: Scripta minora*, 459ff., Loeb Classical Library, London and Cambridge MA.
- Briant, Pierre (2002), *From Cyrus to Alexander: A History of the Persian Empire*, Winona Lake IN.
- Brock, Roger (2009), 'Did the Athenian Empire Promote Democracy?', in Ma et al. (eds.)(2009), pp. 149-66.
- Camp, J. M. (1986), *The Athenian Agora*, London.
- Carter, L. B. (1986), *The Quiet Athenian*, Oxford.
- Cartledge, Paul (2001), 'The Effects of the Peloponnesian (Athenian) War on Athenian and Spartan Societies', in McCann and Strauss (2001), pp. 104-23.
- Christ, M. R. (2006), *The Bad Citizen in Classical Athens*, Cambridge.
- Demont, Paul (2009), *La cité grecque archaïque et classique et l'idéal de tranquillité*, Paris.
- Fornara, Charles W. (1983), *Archaic Times to the End of the Peloponnesian War*, Translated Documents of Greece and Rome 1, 2<sup>nd</sup> ed., Cambridge.
- Freeman, Kathleen (1948), *Ancilla to the Pre-Socratic Philosophers: A Complete Translation of the Fragments in Diels*, Fragmente der Vorsokratiker, Cambridge MA.
- Garland, Robert (1987), *The Piraeus from the Fifth to the First Century B. C.*, London.
- Graf, David (1985), 'Greek Tyrants and Achaemenid Politics', in J. W. Eadie and Josiah Ober (eds.), *The Craft of the Ancient Historian: Essays in Honor of Chester G. Starr*, Lanham Md., pp. 79-123.
- Griffith, Mark (ed.)(1983), *Aeschylus, Prometheus Bound*, Cambridge.
- Hall, Edith (1996), *Aeschylus, Persians. Ed. with an Introd., Trans., and Comm.*, Warminster.
- Hansen, Mogens H. (1988), *Three Studies in Athenian Demography*, Copenhagen.
- (1999), *The Athenian Democracy in the Age of Demosthenes*, Norman OK.
- Hanson, Victor D. (2001), 'Democratic Warfare, Ancient and Modern', in McCann and Strauss (2001), pp. 3-33.

---

(35) 「帝国支配の道具」としての民主政強要については Meiggs (1972), pp. 208-12、Schuller (1974), pp. 82-98、Brock (2009)、Raaffaub (2009b), pp. 105-6 を参照。

- Hornblower, Simon (1991), *A Commentary on Thucydides*, I, Oxford.
- Kagan, Donald (1969), *The Outbreak of the Peloponnesian War*, Ithaca NY.
- Kent, Roland G. (1953), *Old Persian: Grammar, Texts, Lexicon*, 2<sup>nd</sup> ed., New Haven.
- Kirk, G. S., J. E. Raven, and Malcolm Schofield (1983), *The Presocratic Philosophers: A Critical History with a Selection of Texts*, 2<sup>nd</sup> ed., Cambridge.
- Konstan, David (1995), *Greek Comedy and Ideology*, New York and Oxford.
- (1997), 'The Greek Polis and Its Negations: Versions of Utopia in Aristophanes' Birds', in G. D. Dobrov (ed.), *The City as Comedy*, Chapel Hill, pp. 3-22.
- Kuhr, Amélie (1988), 'Earth and Water', in Kuhr and Heleen Sancisi-Weerdenburg (eds.), *Achaemenid History*, III: Method and Theory, Leiden, pp. 87-99.
- Lewis, D. M. (1992a), 'The Archidamian War', *Cambridge Ancient History*, V, 2<sup>nd</sup> ed., Cambridge, pp. 370-432.
- (1992b), 'The Thirty Year's Peace', *Cambridge Ancient History*, V, 2<sup>nd</sup> ed., Cambridge, pp. 121-46.
- Ma, John, Nikolaos Papazarkadas, and Robert Parker (eds.)(2009), *Interpreting the Athenian Empire*, London.
- McCann, David R., and Barry S. Strauss (eds.)(2001), *War and Democracy: A Comparative Study of the Korean War and the Peloponnesian War*, Armonk NY.
- McPherson, James M. (1988), *Battle Cry of Freedom: The Civil War Era*, New York.
- Meier, Christian (1988), *Die politische Kunst der griechischen Tragödie*, München, Engl. trans. 1993.
- (1990a), *The Greek Discovery of Politics*, Trans. by David McLintock, Cambridge MA.
- (1990b), 'Die Rolle des Krieges im klassischen Athen', *Historische Zeitschrift* 251, pp. 555-605.
- (1993), *The Political Art of Greek Tragedy*, Trans. by Andrew Webber, Baltimore.
- Meiggs, Russell (1972), *The Athenian Empire*, Oxford.
- Moore, J. M. (ed., trans.)(1975), *Aristotle and Xenophon on Democracy and Oligarchy*, Berkeley.
- Murray, Oswyn (1988), 'The Ionian Revolt', *Cambridge Ancient History* IV, 2<sup>nd</sup> ed., Cambridge, pp. 461-90.
- Osborne, Robin (2004), *The Old Oligarch: Pseudo-Xenophon's Constitution of the Athenians*, *Introd., Trans., Comm.*, 2<sup>nd</sup> ed., London.
- Raaflaub, Kurt (1988), 'Politisches Denken im Zeitalter Athens', in Iring Fetscher and Herfried Münkler (eds.), *Pipers Handbuch der politischen Ideen, I: Frühe Hochkulturen und europäische Antike*, Munich, pp. 273-368.
- (1994), 'Democracy, Power, and Imperialism in Fifth-Century Athens', in J. P. Euben, J. R. Wallach, and Josiah Ober (eds.), *Athenian Political Thought and the Reconstruction of American Democracy*, Ithaca NY, pp. 103-46.
- (1998), 'The Transformation of Athens in the Fifth Century', in Boedeker and Raaflaub (1998), pp. 15-41, 348-57.
- (2001), 'Father of All, Destroyer of All: War in Late Fifth-Century Athenian Discourse and Ideology', in McCann and Straus (2001), pp. 307-56.
- (2003), 'Freedom for the Messenians? A Note on the Impact of Slavery and Helotage on the Greek Concept of Freedom', in Nino Luraghi and Susan Alcock (eds.), *Helots and Their Masters in Laconia and Messenia: Histories, Ideologies, Structures*, Washington DC, pp. 169-90.
- (2004), *The Discovery of Freedom in Ancient Greece*, First Engl. ed. updated and trans. from the German, Chicago.

- (2009a), 'Early Greek Political Thought in Its Mediterranean Context', in Ryan Balot (ed.), *A Companion to Greek and Roman Political Thought*, Oxford, pp. 37-56.
- (2009b), 'Learning from the Enemy: Athenian and Persian 'Instruments of Empire'', in Ma et al. (2009), pp. 89-124.
- , Josiah Ober, and R. W. Wallace (2007), *Origins of Democracy in Ancient Greece*, with chapters by Paul Cartledge and Cynthia Farrar, Berkeley.
- Rhodes, P. J. (1992), 'The Delian League to 449 B.C.', *Cambridge Ancient History* V, 2<sup>nd</sup> ed. Cambridge, pp. 34-61.
- Ste. Croix, G. E. M. de (1972), *The Origins of the Peloponnesian War*, London.
- Samons II, Loren J. (ed.)(2007), *The Cambridge Companion to the Age of Pericles*, Cambridge.
- Schuller, Wolfgang (1974), *Die Herrschaft der Athener im Ersten Attischen Seebund*, Berlin.
- Strauss, Barry S. (1986), *Athens after the Peloponnesian War*, Ithaca NY.
- Travlos, John (1971), *Pictorial Dictionary of Ancient Athens*, New York.
- Vlastos, Gregory (1953), 'Isonomia', *American Journal of Philology* 74, pp. 337-66, repr. in Vlastos, Gregory, *Studies in Greek Philosophy*, I, Princeton, pp. 89-111.

\* なお史料の翻訳にあたっては、ギリシア語原文・以下の日本語訳を適宜参照しつつ、著者の論旨を損なわないことに留意して訳出した。

アイスキュロス著、高津春繁ほか訳『ギリシア悲劇I アイスキュロス』筑摩書房、1985年  
 クセノポン著、根本英世訳『ギリシア史1』京都大学学術出版会、1998年  
 クセノポン著、松本仁助訳『小品集』京都大学学術出版会、2000年  
 トウキュディデス著、藤縄謙三訳『歴史1』京都大学学術出版会、2000年  
 トウキュディデス著、城江良和訳『歴史2』京都大学学術出版会、2003年  
 ヘロドトス著、松平千秋訳『歴史 上・中・下』岩波文庫、1971年、1972年

## 講演にたいするコメント 1

篠原道法

ラーフラウプ先生、興味深い講演、ありがとうございました。最初に講演についてコメントをしたうえで、いくつか質問をしたいと思います。

デモクラシーと自由は現在を生きる我々にとって非常に重要な意味を持っており、それゆえ一般に、それらの歴史にはポジティブな解釈がされがちです。ですが、講演で指摘されたように、デモクラシーや自由の概念は、一見矛盾しているかのようであり、実際には、戦争や、しばしば「帝国」(Empire)と呼ばれる外的な支配と分かちがたく結びついていました。

まずは、デモクラシーについて見ることにしましょう。伝統的に、ポリスの共同体(Gemainschaft)としての性格が、古代ギリシアでデモクラシーが花開いたひとつの要因と見なされてきました。ポリスにおいて市民は相対的に平等であり、それがデモクラシーを誕生へと

導いたというのです。こうしたストーリーにある程度の妥当性があることは間違いありません。しかしながら、M. I. フィンレイが彼の著書 *Democracy: Ancient and Modern* で述べているように、<sup>(1)</sup> デロス同盟に対するアテナイの支配——それは、しばしばアテナイ「帝国」(Athenian Empire) と呼ばれます——が存在しなかったならば、前5世紀後半の、我々が「ラディカル・デモクラシー」と呼ぶ形のデモクラシーがアテナイに登場することはなかったでしょう。例えば、アテナイの支配は海軍力に依存しており、それが舟のこぎ手であるアテナイの民衆(デーモス)の権力を興隆させたこと、またデロス同盟加盟国からの貢納金がデモクラシーやその担い手である市民を扶養したことはよく知られている事実です。

そもそもデモクラシーの語源となっているギリシア語、デモクラティアは「民衆の権力」もしくは「民衆の支配」を意味しています。この事実を踏まえるならば、アテナイの外的な権力もしくは支配とデモクラシーの間に密接な関係があったことは、ある意味でごく自然と言えましょう。要するに、ポリスを一種の共同体として捉えるのみならず、権力構造へのデモクラシーの埋め込まれ方を考察することによって、我々はアテナイのデモクラシーをより良く理解することができるのではないのでしょうか。<sup>(2)</sup>

次に、自由(エレウテリア)概念についても検討してみましょう。講演で指摘されたように、ペルシア戦争は自由概念の自覚化のひとつのターニング・ポイントでした。さらに、ペロポネソス戦争や、その背景にあるアテナイとスパルタとの間の、ギリシア世界におけるヘゲモニーをめぐる闘争がこの概念の発展に大いに貢献しました。デロス同盟やペロポネソス同盟の加盟国(弱者)ではなく、その盟主たるアテナイとスパルタ(強者)が概念を成長へと導いていたのであり、また同時に、両国は自らの目的、すなわちヘゲモニーの確立のために概念を歪めてさえました。

同様なことは、アウトノミア概念についても言えることを付け加えておきたいと思います。この概念は「独自の法・慣習(ノモス)の下にあること」を意味し、英語の *Autonomy* (「自治」、「自律」)の語源ともなっており、しばしば「独立」もしくは「自治」と訳されます。またポリスを理解するうえでの重要用語のひとつともなっています。これが国際関係上の重要な概念として初めて認知されたのは、おそらく、前446/5年に、アテナイとスパルタ及び、彼らを盟主とするふたつの同盟の加盟国によって締結された三十年休戦条約でのことでした。そして、この概念もまたアテナイとスパルタによるヘゲモニー争いの中で育まれたのです。トゥキュディデスによれば、前者はアウトノミアを「自治」を意味する概念として、後者は「独立」を意味する概念として用いて、それにより、彼ら自身の支配を正当化するか、もしくは敵方の立場を

(1) M. I. フィンレイ『民主主義——古代と現代——』柴田平三郎訳、刀水書房、1991年、80-81頁 (Original: 1973, 1985 [Second Edition])。

(2) この問題については、拙稿「アテナイにおけるデモクラティアの成立とその背景」『歴史家協会年報』2、2006年、31-48頁を参照。なおアテナイにおけるデモクラシーと「帝国」との関係については、P. J. Rhodes, *Democracy and Empire*, in: *The Cambridge Companion to the Age of Pericles*, L. J. Samons II (ed.), Cambridge, 2007, pp. 24-45も参照。

批判しようと試みていました。皮肉にも、こうした強者の側の闘争が究極的に概念を発展へと導いたのです。<sup>(3)</sup>

このように、デモクラシーの場合と同様に、自由とアウトノミアふたつの概念の発展は、戦争や、権力・支配と密接に結びついていました。以上の点を踏まえるならば、ポリスの内的な発展というポジティブな側面だけではなく、デモクラシーや自由概念の発展のネガティブな側面としての戦争や権力・支配の持つインパクトにも注意を払うことが、それらの歴史や本質のより良い理解へとつながると言うことができましょう。

以上の点を踏まえて、次にいくつか質問をします。第一に、用語の利用についてです。講演では「帝国」(Empire)や「帝国主義」(Imperialism)といった用語が使われていました。先に言及したように、古代ギリシア史家は、デロス同盟に対するアテナイの支配をアテナイ「帝国」としばしば呼びます。しかし他の時代の歴史家はこうした用法は場違いであると感じるようで、それゆえにこうした用語の使用には慎重になる必要があります。こうした慎重さは、R. オズボーンが、前8世紀-前6世紀の古代ギリシア人による地中海各地への移住を説明する際に、従来のように「植民」(Colonization)ではなく、「定住」(Settlement)という用語を用いている姿勢からもうかがえます。<sup>(4)</sup>こうした点を踏まえますと、たとえトウキュディデスがアテナイによる外的な支配を、アルケ(「統治」,「支配」)もしくはヘゲモン(「覇権」)と見なしていたとしても、かかる状況を説明するために「帝国」や「帝国主義」という用語を利用することは適当と言えるのでしょうか。

第二に、「いかにしてアテナイはその支配を正当化したのか」をめぐる議論で登場した、アウトアルケイア概念についてです。アウトアルケイアは「自給自足」(Autarky)を意味し、アウトノミアのように、ポリスを理解するうえでの重要用語のひとつとなっています——ひょっとすると、アウトノミアの中身を表すのがアウトアルケイアなのかもしれませんが——。例えばアリストテレスは、ポリスの条件について説明する際にこの概念を重んじています。<sup>(5)</sup>管見の限り、講演に登場したペリクレスの葬礼演説が、ポリスとの関連でアウトアルケイアが意識的に利用された最初の事例です。<sup>(6)</sup>そうであるとするならば、自由だけではなくアウトアルケイアもまた、戦争をつうじてポリスの条件として「発見された」と考えても良いのでしょうか。

第三に、自由の「発見」についてです。これをめぐっては、講演ではペルシア帝国やペルシア戦争の役割が強調されていました。この概念が戦争をつうじて発展したことは疑いがありま

---

(3) この問題については、拙稿「前五世紀後半における国際関係とアウトノミア概念——アテナイとスパルタのヘゲモニー争いを背景に——」『立命館文學』604、2008年、20-37頁を参照。またアウトノミアは、もう一人のコメンテーター岸本氏と共通の問題関心の対象でもある(岸本廣大「連邦から見たポリスのアウトノミア——ポイオティア連邦の分析を通じて——」『西洋古代史研究』9、1-31頁)。

(4) R. Osborne, *Ealy Greek Colonization?: The Nature of Greek Settlement in the West*, in: *Archaic Greece: New Approaches and New Evidence*, N. Fisher and H. van Wee (eds.), London, 1998, pp. 251-70. 「植民」という語の不適切さについては、ロビン・オズボーン「ポリスを創る」『ギリシアの古代』佐藤昇訳、刀水書房、2011年、55頁(Original: 2004)も参照。

(5) E.g., Arist. *Pol.* 1252b, 1253a, 1261b.

(6) Thuc. 2.36.3.

せん。私もまた、先に述べたとおり、戦争の役割を強調することには賛同します。ですが、それと同時に、ポリス内部での動向にも目を向ける必要があるとも考えています。

実態としての自由と概念としての自由は区別されるべきであり、前者の問題に目を向けた場合、ソロンの時代がターニング・ポイントであったと思われます。たとえ「自由」の形容詞形（エレウテリオス）がソロンの詩で二度登場しているにもかかわらず、抽象名詞としての自由はこの時代に登場していなかったとしても、ソロンの時代に生じたポリス内部における従属や権力の問題は、例えば「良き法・慣習の下にあること」あるいは「良き秩序」を意味するギリシア語、エウノミアのような別の概念をゆりかごにする形で、自由概念を育んだように思われます。これは、自由の「発見」のありうるプロセスのひとつなのではないでしょうか。この点を踏まえて、自由の「発見」におけるソロンの時代の役割についてどのようにお考えなのかをお聞かせください。

最後に、自由概念の受容についてです。タイトルが示唆するように、本講演の議論の舞台の中心はアテナイとなっています。確かに、自由概念はアテナイで花開き、アテナイ人は外交上で自らに益するようにこの概念をしばしば用いていました。それでは、この概念はどのように他の人々によって受容されていたのでしょうか。古代ギリシアにおける自由概念の発展を理解するためには、支配者側だけではなく支配される側の視点から、あるいは、発信者だけではなく受信者の視点から考えることが必要なのではないのでしょうか。

例えば、外交上、アテナイ人は自らの支配の正当化のために自由概念を利用していたため、アテナイ流の自由の捉え方に反対する人々がいたこと、また彼らがこの概念を再解釈、再考したことは容易に想像できます——同時に、一部の人がポリス内部で権力を握るためにアテナイ流の自由概念を用いていたことも確かですが——。そこで、支配される者、もしくは受容者の観点に立った場合、古代ギリシアにおける自由の発展はどのように解釈されうるのかについて、お聞きしたいと思います。

加えて、我々は政治家が用いた自由概念を、一般のアテナイ人自身がどのように受け止めたのかについても考える必要があるでしょう。また講演の最後の部分で言及された、アテナイによるデモクラシーの推進の問題も、推進者（アテナイ）はなく、受け手側（他国の人々）の視点から考察される必要があるかと思えます。このように関心はさらに広がって行きますが、まずは、アテナイの外部における自由概念の受容の問題について、お聞かせください。

以上です。ご清聴、ありがとうございました。

講演にたいするコメント<sup>(1)</sup> 2

岸本廣大

ラーフラウプ先生、ご講演ありがとうございました。ペルシア戦争を経て「自由」がどのように政治的概念として認識されたのか、そしてその意味がペルシア戦争の後、ペロポネソス戦争を通してどのように変化したのか、ご講演を通じて学ばせていただきました。「自由」を政治的概念として扱い、その歴史をたどっていく考察は、私にとって興味深く感じられました。特に、互いに正反対に思える民主政と帝国が自由によって結びつけられたという考察は魅力的です。なぜなら、「自由」・「民主政」・「帝国」は、現代でも重要なテーマだからです。ご指摘の通り、この講演は現代社会にとっても非常に示唆的でしょう。

さて、講演の内容を議論し深化させるために、いくつかの質問をしつつ、本セミナーの論点を提示させていただきます。ただ、私の質問は篠原さんのそれと通ずるところがあるかもしれませんが、それは、私たちが後述する「アウトノミア」について同じ関心をもっていたからです<sup>(2)</sup>。どうぞご理解ください。

この講演においては「自由」だけでなく、「平等」と「アウトノミア（独立あるいは自治）」の三つの概念およびその意味の変遷が重要であると私は考えます。講演では、特に「自由」に焦点を絞って紹介していただきました。そこで、まず「自由」と他の二つの概念の関係をお尋ねしたいと思います。

最初に提示する論点は「自由」と「平等」の関係についてです。アテナイでは、政治的概念として「平等」が「自由」に先行し、本来「自由」は社会的概念であったこと、そしてペルシア戦争を通して「自由」が政治的概念となったことが指摘されました。では、「自由」が政治的概念と化したとき、両者の関係に何らかの変化が生じたのでしょうか。その質問にお答えになる前に、古代ギリシアにおいて本来「平等」がどのような意味であったのか考察すべきでしょう。というのも、「平等」には様々な種類がありうるからです。例えば、全員に全く同じ権限を割り当てる平等もあれば、それぞれの責任に応じた権限を割り当てる平等もあります。前者の例として、成人男性市民全員に市民権を付与する民主政が挙げられるでしょう。また後者の例としては、連邦の評議員や公職者ポイオタルコスを人口に応じて 11 の区に配分したポイオティア連邦があります<sup>(3)</sup>。「自由」が政治的概念となる以前、アテナイにおける「平等」とは

(1) 本稿は、セミナー当日に英語で行った口頭発表を日本語に翻訳したものである。翻訳にあたり、口頭発表であったことを考慮し、基本的に口語的な表現を用いた。また、コメントに直接関係しない前置きの部分を省略した。以上の点について、ご理解願いたい。

(2) 篠原道法 [2008] 「前五世紀後半における国際関係とアウトノミア概念——アテナイとスパルタによるヘゲモニー争いを背景に——」『立命館文學』第 604 号、524-541 頁、拙稿 [2009] 「連邦から見たポリスのアウトノミア——ポイオティア連邦の分析を通じて——」『西洋古代史研究』第 9 号、1-31 頁。

(3) *FGrH* 66. XI. 3-4. Cf. 拙稿 [2009]、10 頁。

どちらを意味していたのでしょうか<sup>(4)</sup>。もし後者（すなわち寡頭政的平等）を意味していれば、ペルシア戦争後にギリシア人たちが新しい概念「自由」を必要とした理由を理解できるでしょう。しかし前者の場合、ペルシア戦争の勝利を説明するのに、その「平等」の意味のままではなぜ不適當だったのでしょうか。「平等」の意味および「自由」との意味の違いを明確にすることで、ペルシア戦争が古代ギリシアにもたらしたインパクトが、具体的に示されるのではないのでしょうか。「平等」と「自由」の違いこそが、支配者すなわちアテナイによる「自由」の利用（そして歪曲）を引き起こしたように私には思えます。

さらに、自由の意味の変化についても質問があります。そもそも、意味の変化はアテナイ人にどのように受容されたのでしょうか。講演では、アテナイ人が「最も自由」であるために、「自由」がアテナイの帝国支配を正当化するプロパガンダとして用いられたことが指摘されました。しかし、その意味の「自由」はもはや「平等」とは異なります。アテナイ人は新しい「自由」の意味（とそれに基づく「帝国」イデオロギー）に違和感を覚えなかったのでしょうか。

さらに、この問題について実際的な視点から考えてみましょう。アテナイ人は帝国支配のために、「自由」の意味を変化させました。しかし、「自由」の新しい意味は、本当に帝国支配に機能したのでしょうか。私はそう思いません。なぜなら、講演で示されたようにアテナイ人に支配されていた人々も違った意味の「自由」をアテナイ人に対して用いていたからです。

このような「自由」の歪曲と濫用による政治的価値の低下によって、新しい概念の誕生が必要とされたのではないのでしょうか。私は、それが「アウトノミア」であると考えます。ハンセン教授や篠原さんの研究が指摘するように<sup>(5)</sup>、ペロポネソス戦争において、スパルタはアウトノミアを「独立」という意味でスローガンに掲げ、他方でアテナイは自らの「帝国」支配の正当化の「自治」として用いました。この事実は、「自由」という言葉に不信感が募ってきた、少なくとも内実を伴っていない表面的な意味の言葉だと認識されていたことを示すのではないのでしょうか。ここで、私たちは二つ目の論点にたどり着きました。「アウトノミア」と「自由」との関係です。

以前論文に著した私の考察では、スパルタの勝利と「大王の和約」によってアウトノミアの「独立」の意味が確立し、続く一連の「普遍平和」条約によって、大国に有利な「自治」へと意味が変化します。そして、ヘレニズム時代には「自由」同様に、支配者から付与されるものとなりました<sup>(6)</sup>。例えば、前313年にはマケドニアのアンティゴノス1世とエジプトのプトレマイオス1世がそれぞれギリシア人に自由とアウトノミアを付与しています<sup>(7)</sup>。第2次マケドニア戦争後にマケドニアの支配地域に自由が付されたとき、ローマの将軍フラミニヌスによってア

(4) K. A. Raaflaub [1998] Transformation of Athens in the Fifth Century, in: D. Boedeker and K. A. Raaflaub (ed.) *Democracy, Empire, and the Arts in Fifth-Century Athens*, pp. 15-41.

(5) M. H. Hansen [1995] Boiotian Poleis - a Test Case, in: id. (ed.) *Source for the Ancient Greek City-State. Acts of Copenhagen Polis Centre 2*, Copenhagen, pp. 13-63; Id. [1995] The 'Autonomous City-State'. Ancient Fact or Modern Fiction?, in: id. and K. A. Raaflaub (ed.) *Studies in the Ancient Greek Polis. Papers from Copenhagen Polis Centre 2*, Copenhagen, pp. 21-43; 篠原 [2008]、527-534 頁。

(6) 拙稿 [2009]、19-20 頁。

(7) Diod. 19.61.3; 62.1.

ウトノミアに類する表現が用いられていることも指摘しておきます<sup>(8)</sup>。意味の変化と政治的価値の低下という点で、「自由」と「アウトノミア」が同じ歴史をたどったため、両者は同義語であるように見えます。

ラーフラウプ先生は、古代ギリシア世界における「自由」と「アウトノミア」の違いはどのような点にあるとお考えでしょうか。「アウトノミア」はあくまで「自由」の代替品として用いられたに過ぎないのでしょうか。そうでなければ、「自由」と「アウトノミア」の違いは何でしょうか。ラーフラウプ先生の意見をもとに、私たちは古代ギリシアにおいて「自由」とは何かだけでなく、「自由」と「アウトノミア」を求めていたポリスとは何であったのかについても議論することができるでしょう。

最後に、もう少し広い観点から2つの質問をいたします。まずラーフラウプ先生は、「自由」の政治的価値は、ペルシア戦争を通じてギリシアで発明されたのが最初だとおっしゃられました。戦争は、古代ギリシアだけでなく、時代や地域を問わずに行われてきたことを考えると、ギリシアで初めて「自由」の政治的価値が発明されたのは何故なのでしょう。この点は、世界史における古代ギリシアの特徴を明らかにするという意味で重要でしょう。

また、アテナイ（あるいはそれ以外）による「自由」の歪曲は、政治の分野以外でどのような変化や影響をもたらしたのでしょうか。例えば、政治的概念としての「自由」がプロパガンダと化し、実質的意味を失う中で、社会的概念としての「自由」にも何らかの変化は生じたのでしょうか。生じたとすればどのような変化なのでしょう。この点は、古代ギリシア・ローマ史における奴隷制の歴史にとって興味深い指摘を与えるかもしれません。

以上が、私のコメントです。最後に、論点を整理しておきましょう。最初と二番目の論点は「自由」と「平等」、それから「自由」と「アウトノミア」の関係についてでした。この論点から、私たちは古代ギリシアの概念史を深めることができます。また、古代の戦争におけるイデオロギー対立の具体像の理解にもつながるのではないのでしょうか。

後半の質問は、「自由」の概念が発明された歴史的背景と、その発明と歪曲による後世への影響、変化についてでした。この論点は、ギリシア世界だけでなく、様々な視点から深められるべきです。それによって、ギリシアが発明した「自由」の意義や世界史における古代ギリシアの歴史的な重要性が議論できるでしょう。

ご清聴ありがとうございました。

---

(8) Polyb. 18.46.5; Livy. 33.32.5.

## コメントへのレスポンス

クルト・ラーフラウプ（野村紅太訳）

篠原道法・岸本廣大両氏による卓越した鋭い論点提示に感謝します。これらの質問に詳細に答えるためには、もう一本論文が必要となるでしょう。これらの問題のほとんどについては拙著 *The Discovery of Freedom in Ancient Greece*, 2004 の中で、もっと完全に論じているので、ここで私は、両方への回答を組み合わせて、2、3の不可欠な論点に焦点を合わせたいと思います。

まず、外的自由に対する内的自由、つまり、外的支配からの自由にたいするコミュニティ内での抑圧からの自由についての質問から始めましょう。第一人者の支配によって市民が「奴隷状態」（ドゥロシュネ）におかれる僭主政治は、アルカイック期のギリシアでよく知られた現象です。それはソロンの詩にはっきりと確認することができ、少なくとも抑圧からの自由がペルシア戦争よりもはるか以前から役割を演じていたのは明らかです。ソロンは抵当標石によって重荷を背負わされたアッティカの土地と、外国に奴隷として売られた債務奴隷について話すときにも、「隷属」という言葉を使います。負債を帳消しに、債務奴隷を禁止して、土地と人の両方を自由にしたのだと、ソロンは誇りを持って明言しました。このように、負債について話すときに、ソロンは「自由」（エレウテリア）という言葉を使っていますが、それは自由と隷属の社会的な対比に相当しています。義務からの自由と、個人の奴隷であることからの自由という意味において、「自由」という言葉は古代のオリエント文明、青銅器時代のギリシアの線文字B、それにホメロス作品の中に、ひろく確認されるのです。

少なくともはっきりとした明確な記述としては欠けているのが、僭主の支配からの自由という政治的な意味での「自由」であります。私にとって重要なのは、ソロンもこの語をこの文脈では使っていないことです。そう考えるのは、言語上「奴隷」には2つの対義語（「自由」と「主人」）があるからです。奴隷と主人の対比はアルカイック期ギリシアにおいて普通のことでした。比喩的に、家（オイコス）とのアナロジーを適用するなら、僭主の被支配者としての市民は、奴隷もしくは主人の使用人にあたります。オデュッセイアの中で、オデュッセウスは解放によってではなく、自身の家での地位向上によって、すなわち、オデュッセウス自身の家の近くに家を与え、息子のテレマコス兄弟のように扱うことによって、忠実な奴隷に報いました。従前の社会的な枠組の中で奴隷と僭主の対比をこのように理解することができます。この政治的な文脈の中であってさえ、まだ奴隷のもう1つの対義語である「自由」を活性化することにいたりませんでした。（もう1つの理由は次に述べるように、僭主政治へのもう1つの対義語としての平等の出現です。そしてそれはそうした面で最も重要だった階級であるエリートにとって自由よりもはるかに魅力的で意義深かったのです。）

現存する証拠によると、政治的な意味での「奴隷」の対立項としての「自由」は、ギリシア諸ポリスが外的な奴隷状態（ペルシア人による支配）だけでなく、内的な奴隷状態（ペルシア人によって課された僭主政治による支配）に脅かされていた、ペルシア戦争期に導入されまし

た。それゆえ、「自由」は同時に、両方の側面において価値をもつこととなりました。実体としての自由と概念としての自由の対比が、討論のなかで、問題となりました。たしかに、ソロンの時代には実質としての自由が存在したのですが、まだギリシア人にはそれを概念としても定式化させ、そのための言葉を作らせるほどの理由がありませんでした。これらすべてについて、政治的な用語がただ単に存在したわけではないということを思い出さなければいけません。どういうことかということ、政治的な用語は、状況がこれを必要とした時に作り出されるということです。ペルシア戦争で必要とされ発明されるまで、古代世界には政治的な自由を指し示す言葉も概念もありませんでした。（私は、なぜギリシア以前にどの古代文明も自由の政治的な概念を発展させなかったのかについてもコメントする予定です。）

同じことはアウトノミアに対しても言えます。この言葉もまた必要とされるまで存在しませんでした。現存する史料によると、この言葉は前5世紀中葉に生み出されました。そのため、われわれはその創造を促した需要を確かめる必要があります。この単語の意味は、エレウテリア（自由）とは明らかに異なっています。後者は、コミュニティが外的な力によっても内的な抑圧者によっても支配されていないことを表現します。つまり、——具体的な状況下では、もちろんかなり肯定的な価値をも想定しながら——「非自由ではない」ということを意味する二重に否定的な用語なのです。アウトノミアは非常に肯定的なもの、すなわち、個人の、あるいはコミュニティの自己決定にたいする能力、ポリスが法を定めたり、統治したりする力を強調します。通常、それは「自由」の一部だろうし、その限りで、誰も強調する必要がありません。しかし、外的な自由が疑わしくなり、外部からの支配の強制に脅かされるようになったとき、自治の面を定式化することが重要になったのです。あたかも、「もしわれわれが完全には自由でないならば、少なくともわれわれは法と政治という内部の領域の支配を望み、アウトノモス（アウトノミアな状態）でありたい」とでも言うかのように。この単語が出現した時代を考慮すると、私はアテナイの拡張と、アテナイ「帝国」によって課せられる支配が強まったことへの反応として説明するのが自然だと考えます。

アウトノモス（自給自足）はアウトノミアの一部だったのでしょうか。私はそうは思いません。拙稿で説明したように、自給自足は神々、賢人、あるいはなにも特別なものも必要としない人によってしか成し遂げられないと、一般的にみなされています。原始的な自給自足的農民やエスキモーは自給自足できていたでしょうが、それはどれほどの期間だったのでしょうか？とにかく、実質的には、アウトノモスはヘシオドスによって既に理想として認識されており、アリストテレスによっていっそう発展させられていました。しかしおそらく、用語ないし政治的概念としてのアウトノモスは、ペリクレス時代アテナイの、プロパガンダ的な自己表現を通じて作り出されていたのでしょう。つまりこのとき、アウトノモスは、民主政と帝国におけるその権力を通じてアテナイが到達した、独立の比類無き達成を定式化する手段として作り出されたのです。この説明はわれわれが有する証拠に合致し、その用語が使われた日付と文脈にも合います。

なぜ、理念ではなく政治的な自由が、ギリシア人がペルシア戦争をする以前に、他の古代世

界で発展しなかったのでしょうか。ほとんどの古代社会は君主によって支配され、君主のために支配されていたので、自由以外の側面が、つまり、彼ら自身の支配、権力、帝国とその防衛、確立、拡張の方法がより重要でした。ギリシアのポリスに相当するとみなされる「都市国家」（例えば、シュメールや初期中国のもの）でさえ、市民によってではなく、野心的な王によって支配されていました。ギリシアのポリスは「都市国家」（この用語は通常ポリスのために使われるのですが）ではなく、「市民国家」であり、このことが大きな差異を生み出しました。いったん、ギリシア人が「エレウテリア」という用語を編み出すと、他の人々もそれを使うことができました。ギリシア人についてとても興味深いことは、ギリシア人のテキストが新しい政治的な用語を創造する過程をたどり、分析することを可能にしていることです。これは他のところでは不可能でした。

良い理念が権力闘争と支配の要求によって打倒されがちなことはギリシアの悲劇であり、もっと言えば人類の悲劇です。これは、（拙著で詳述しているように）アテナイ人とスパルタ人両方のプロパガンダにおいてエレウテリアに起こり、ペロポネソス戦争時にアウトノミアに起こり、前4世紀にさらに伸長したのです。当日の議論の中で指摘されたように、両方の強国が、互いを攻撃するためにその用語を利用しました。「大王の平和」にはじまる「コイネ・エイレネ」条約は、平和のための国際的な協力のための広い土台となるシステムを設立するための試みとして有望なものでありながら、責任を持つべき人（プロスタテスだったスパルタ）がライバル（特にエリスとテバイ）の力を削ぐための道具としてアウトノミアを用いたので、失敗に終わったのです。

平等についてはどうでしょうか。すでに示唆したように、これは第一義的に貴族的な用語です。僭主が無効にしエリートが取り戻したがった、共有され平等な権力の理想を表現しています。（これは、自由が僭主政治の対義語として普及しなかったもう1つの強い理由でもあります。）平等は相対的なものであり、適用される集団によって定義づけられます。そのため、スパルタと、前6世紀末のアテナイのクレイステネスの改革でおきたように、アウトノミアの概念は、同心円のなかで、どんどんエリート家系から外へ向かって、ポリスの軍隊に奉仕する自立した農民を含むようになり、そして、結局、「民主政」下の全成人男性市民を意味する全市民に広がりえたのでしょうか。会場での議論は正しくも、軍隊の発展とともにこの過程の関係を強調しました。ギリシアのポリスにおいて社会的地位と経済的、軍事的能力、政治的権力の権能の付与との間にはとても強い関係があったためです。初期スパルタにおいて、ホプリテース（重装歩兵）であることは、大多数の奴隷（ヘイロータイ）と隷属的な自由民（ペリオイコイ）に対して完全な市民としての特権を守る際に重要だったので、前7世紀中葉の最初の国制（大レトラ）は共同の意思決定における民衆の主権を記しました。デロス同盟とアテナイ帝国の海軍政策によって、下層民は船の漕ぎ手としての、そしてアテナイの防衛、権力と繁栄の擁護者としての重大で永久的な役割を与えられ、そこに民主主義における完全な市民としての選挙権を与えられる可能性と必要性が出てきたのです。しかしながら、この過程はいまだなお「平等の拡張」とひとまとめにすることができるでしょう。「平等」が国制上の発展を支配していた

ので、「自由」は、前5世紀中葉に完全な民主主義が出現し、民主政と寡頭政の間に際立った対比が明らかになるまで、国制の発展に一役を担わなかったのです。私は今回の講演でこのことを説明しました。いくつかの政治的な用語は民主政と寡頭政の対立という文脈の下に、分裂していました。「デーモス」は、すべての人々とエリート以外のすべての人々の2つに、そして、平等は、普遍的・統計的・算術級数的意味（すべては例外なしで平等）であることと、限定的・比例的・幾何学級数的な意味（特定の社会的な基準を満たす人々のみが本当に平等）との間に分裂していたのです。

国制に適用するならば、これは議論に取り上げたアテナイの民主政とポイオティアの連邦制の間の差異に関係しています——ただし、後者にあらわれているのは、どちらかと言えば公平な代表制の理念でしょう。つまり、代表の数が市民の数に比例するという制度です。比例はここでは、社会階層（上述の幾何学級数的な平等の原則の場合のように）ではなく、数に基づいており、この種の、代議制政府に典型的な比例制は、前6世紀後半のアテナイですでに、村々、つまり地域「デーモス」がおよそ60人につき1人の議員を送り込んだクレイステネスの500人評議会によって獲得されていました。

なぜ、平等の理念はペルシア戦争で重要な役割を演じなかったのでしょうか。なぜなら、問題の焦点は、どのくらいの市民が政治的に平等であるべきかということでもなく、市民が比例的に代表を送ることができていたかどうかでもなかったのです。ペルシア戦争は制度に対する闘争ではありませんでした。問題は、ギリシアのポリスがこれからも自由であるかどうかであり、自分たちの政策と国制を決定できるかどうかでした。そのため、優勢な用語は平等ではなく、自由でした。

イデオロギーとプロパガンダの歪曲によって自由の意味と使用法を変えたことはアテナイ人（と、後にはスパルタ人）のためになったのでしょうか。短期的にはおそらく有益でしたが、長期的にはそうではありませんでした。つまり、そうしたプロパガンダの犠牲者はそれを「買い被らなかった」のです。前411年アテナイの寡頭派は、アテナイが彼らの多くに押しつけた民主政に対する広範囲にわたる反抗を知っていたので、民主政を廃止し寡頭政がとって替わることで、関係するポリスが忠誠を保つことを望みました。彼らは全く間違っていました。すなわち、こうしたポリスの目的はアテナイの支配からの脱却であり、国制は二の次だったのです。しかし、この「歴史の教訓」は他のものたちが（われわれ自身の時代にいたるまでのあらゆる歴史の過程で）自由を喧伝し、そうしたプロパガンダを通して支持者を魅了し、自由を帝国の抑圧に変えることを妨げはしませんでした。そして、典型的なことには、われわれが最近、中東欧で目の当たりにしたように、そうした圧政は結局のところ軍事力を通して維持されるしかなく、軍事力が不十分だとわかるとすぐに帝国は崩壊したのです。

最後に、なぜアテナイの人々は為政者のイデオロギーやプロパガンダに賛同したのでしょうか。なぜ彼らアテナイ人は自由と覇権を抑圧と帝国支配へと変える歪曲を受け入れたのでしょうか。（ついでながら、私は「帝国」と「帝国主義」が問題のある用語であり、今日的な意味を有しており、従ってある程度時代錯誤的なことに、同意します。同じことが「国家」と「都

市」や他の多くの用語についても言えるのは事実でしょう。難しいのは、価値自由な用語を見つけることです。われわれは、われわれの多くがポリスの語を用いるのと同様に、古代ギリシアの用語アルケーを用いたり、「制海権」という用語を用いたりすることができます。イアン・モリスは最近、「大アテナイ国」の使用を提案しました。これは明らかに役に立たず、おそらく間違っただけなのかもしれませんが、あらゆる選択肢がそれぞれに問題を引き起こします。私にとっての解決策は、はっきりと問題点を認識して、「帝国」の語を使用することであると思います。）アテナイ人のことに戻りましょう。私は再度、これらすべてが、ギリシア世界において、新しかったことを強調しておきましょう。ポリス市民が民主政を樹立し、数多くの他のポリスへと拡大することが可能となったのは初めてのことでした。物質的な利益は別として、アテナイ人は権力感覚と達成感に夢中になりました。アテナイ人は自分たちが望めばできないことなど何もないと感じていました。すべての組織が崩壊するまでずっと、民衆の力での大きな——そして（多くの点で称賛に値しないけれども）それなりに魅力的な——実験でした。同時に、すべての面で、この実験が酷く競争的であり、（そのため、民会や同時代の文献での激しい議論があった）詩人、歴史家、哲学者が、否定的な結果に光を当て、市民に警鐘を鳴らすために膨大な努力していたことを見過ごしてはいけません。そして、その同じ状況がまた、芸術の全領域で、とりわけ、政治理論と道徳哲学の分野で、とても素晴らしい文化的な向上を生み、他の発展がそれに密接に結びついていたことを見過ごすのは難しいことです。（「自由」はそこでかなり大きく、生産的な役割を担いました。）

結論として、世界史の中でもっとも重要な、そして現代のわれわれにも非常に関連している、政治的な概念のいくつかは、戦争と闘争を通して、あるいはそれに対抗して発見されたのであり、民主政でさえ軍事的な側面を持っていたことは（悲しむべき事実でもありますが）真実です。このことは歴史を通じて真実です。すなわち、われわれはどれほど多くの科学的発見が戦争のためになされたのか、そしてどれほど多くのあらゆる種類の文化的な偉業が実際、戦争によって生まれた利益に負っていたのか考えるだけでよいのです。もちろん、このことをまた、ギリシア人たちは早くから理解していました。そして哲学者のヘラクレイトスはこれを「戦争はすべての父だ」というフレーズで印象的に表現したのです。